

実践報告

平成24年度 本校の研究のまとめ
「探究の楽しさ」が駆動する学びの創造
～へえー，なぜ？，なるほど，わかった！のスパイラルを目指して～

The 24th year of Heisei

A Summary of Research Activities of Our School

The Creation of Studies to Cause Students' Inquiring Minds

～ Aiming for the spiral "Really? Why? I see! I got it!" ~

研究推進委員会

Research Promotion Committee

I はじめに

1. 研究テーマについて

これまで本校の研究において着目してきた「探究の楽しさ」は、学習者の学びの内発的動機付けとなり、主体的な学びを駆動する（力強く推し進める）原動力となり得ると考えた。そこで、平成24年度の本校研究テーマを「『探究の楽しさ』が駆動する学びの創造」とした。

また、このような学びを深めていくことで、「質の高い学び」を実現すると考えた。「質の高い学び」とは、「教科の軸」につながる学び、教科の「基礎・基本」の充実につながる学びと捉えた。ここで言う「教科の軸」とは、教科の中心にあってどのような場面でもおれることのない、教科の独自性を示すような本質的な学びと考えた。また、「基礎・基本」とは各教科で特に重視している力や知識・技能などの様々な要素と捉えた。

2. 研究のサブテーマについて

探究の過程を「課題設定」「課題追究」「表現と省察」と場面を分けて考え、それぞれの場面で「『探究の楽しさ』が駆動する学びの創造」を具体的にイメージし、生徒の「へえー，なぜ？，なるほど，わかった！」といった心の内なる声を引き出すための教員の支援や指導過程の工夫を検討した。

また、「『探究の楽しさ』が駆動する学びの創造」は新たな「『探究の楽しさ』が駆動する学びの創造」につながる。一つの学びの終末が次の学びの始まりになるだけでなく、学びの途中で小さな学びが生まれたり、枝分かれして複数の学びが生まれたりすると考えた。つまり、学びのスパイラルは単純な螺旋階段のようなものではなく、学びが複雑に組み合わせり行きつ戻りつしつつ、より大きな「『探究の楽しさ』が駆動する学びの創造」へと学びが成長していくイメージである。

3. 研究のための5つの要素

「『探究の楽しさ』が駆動する学びの創造」における探究の様々な場面で、学習者を支える要素を考慮しつつ、以下の5つのグループを作って研究を進めてきた。

①「探究の楽しさ」と基礎・基本の充実

各教科の「教科の軸」や「基礎・基本」を改めて問い直し、それを意識した授業を実践し検討した。

②論理的思考力

探究的学びを支える「論理的思考力」を育成する指導方法を見出し、実践と検討を行った。

③話し合いの力

協働を支える「話し合いの力」を育成する指導方法を見直し、実践と検討を行った。

④道徳

様々な価値観や他者理解、学び合いの姿勢を育成することで、学習者の自律を支え、学習者同士の相互作用や互恵的な学びを活性化させられると考え、道徳教育を改めて検討した。

⑤帰国生の学び

帰国生対象の授業で見出される個に応じた支援は、帰国生だけでなく全ての生徒の学びの支援につながるを考え、帰国生の学びにおける「『探究の楽しさ』が駆動する学び」を見直し検討を行った。

(園部)

A. 「探究の楽しさ」と基礎・基本の充実

1. なぜ、「探究」と「基礎・基本」なのか？

「探究」という語は、一般には、教科における習得・活用型の授業、総合における探究型の授業という使われ方をすることが多い。発展的、総合的な課題に関心を持ち追究していくイメージである。しかし、本校ではこうしたとらえ方ではない見方が必要だと考えた（詳細は2010年度本校公開研究会紀要参照）。教科で基礎・基本を学ぶことと「探究」とは、決してかけ離れたものではなく、教科において、基礎的・基本的な知識や技能の習得をはかる場合も、生徒たちの探究心を引き出すよう工夫したり、学習の展開そのものを探究的なものにしていく工夫をしたりすることで、一層深く理解されたり身についたりしてより確かな力となっていく。また、教科学習の中で既習の知識や技能を発展的、応用的、総合的に活用するようなより高次の探究活動を展開していくことで、既習の知識・技能を多角的に捉え直し再構築していくことになる。このことが、より確かな基礎・基本の定着へとつながると考える。

また、総論にもある通り、「探究する力」を育てる上では、学習者が「探究する楽しさ」を実感することが重要だと考える。「課題設定」、「課題追究」、「表現・省察」の探究の過程の中で、学習者が「探究する楽しさ」を実感することが、学習者の学習意欲を高め、自ら学び考えようとすることにつながるのである。そして、知識や技能が確実に身につけ深められるだけでなく、そのことがさらに新たな知識や技能の習得につながることもあれば、実生活に活かそうとしたり、新たな探究につながったりもするのである。

私たちは学習者が「探究する楽しさ」を実感できるような授業を工夫することを大切にし、「探究の楽しさ」と基礎・基本の充実に重点を置いた授業づくりを目指すこととした。

2. 教科の軸

各教科の基礎・基本とは何かを考えたときに、授業者側には、その教科の軸となる、教科学習を通して学習者に身につけて欲しい力がある。教科の軸とは、教科の中心にあって、どのような場面でも

揺らぐことのない教科の独自性を示すような本質的な学びと言える。毎回毎回の授業であるいは各単元の中で身につけさせたい知識や技能の一つ一つだけでなく、教科学習全体を通して学習者に身につけて欲しいと願う教科の軸と言うべきものを各教科で話し合い共有し、教科で共通した認識を持っていくことにした。「各教科の軸」は次頁の表に示す。

3. 「探究の楽しさ」が学びを駆動するための工夫

学習者が「探究」するためには、それが楽しい、もっと探究したいという意欲が自発的に生まれてくるような学習過程が必要である。学習者が疑問を感じたり不思議に思ったりして、調べてみたい、試してみたい、やってみたいという意欲が生まれるような授業の工夫が鍵となる。学習者の自発的な学びの推進力となる「探究の楽しさ」が、どのようにすれば学習者に感じられ、学びを駆動させていくことができるのか、その工夫の視点として学習過程の中に「課題設定」「課題追究」「表現・省察」の探究の過程を意識的に設け、授業をデザインするよう取り組んでみた。

各教科における「『探究の楽しさ』が駆動する学び・授業づくり」については、次の各教科の頁でそれぞれ述べている。

(大塚・栗原・佐藤・藺部・加藤)

探究と基礎基本 WG

<各教科の軸 一覧表>

	教科の軸	教科の基礎・基本
国語	場に応じて駆使できることばの力 ～言語文化の継承と創造～	「ことばの力」 ・ことばで伝え合い協働する ・ことばで考える ・ことばで感じる・想像する ・ことばを楽しむ
社会	社会の一員として「考え、表現し、行動する力」を身につける教科	・社会的事象に対する関心を高め、様々な情報を自ら収集し、種々の資料を的確に読み取り、それに基づいて多面的・多角的に考察できること。 ・国際社会の一員であるという自覚を持ち、平和で民主的な国家・社会を形成していく上で必要な公民的資質の基礎を身につけ、社会に積極的に参加しようとする意志を持つこと。
数学	数・式や図形を用いて論理的に推論し物事を解決する力	・数と式・図形・関数などについての概念や性質の理解 ・式に関する表現、読み取り、計算・処理 ・図形に関する表現、作図 ・関数関係の見い出しと表・式・グラフの関連づけ ・資料の整理
理科	自然観を養う	・自然の事物・現象を題材にした知識や技能 ・科学的な思考力や表現力 ・自然と関わっていこう、向き合っていこうという関心や意欲
音楽	音楽の良さや美しさを主体的に感じ取り表現する	・音楽の響きを受け入れ、向き合っていこうとする感心や意欲 ・鳴り響いている音楽に結びつけて知識を理解する力 ・身体動作の原則に則して工夫しながら、歌唱、楽器演奏の技能を身につける力 ・音の高低、強弱、音色等の変化を感じ取ることができる力
美術	形・色彩・材料を生かして、自分の表現したいことや思いを他者に伝える力	・感じ取ったことや考えたことなどを基に、絵や彫刻などに表現する活動を通して発想・構想する力 ・伝える、使うなどの目的や技能を考え、デザインや工芸などに表現する活動を通して発想や構想する力 ・形・色彩・材料を使い、描いたりつくったりする技能 ・自然の造形、美術作品や美術文化に関心をもち、自分と美術との関わりに関心をもち、よさや美しさなどを味わう力
保健体育	身体を自発的に育て、運動を通して自己実現を図る力	・運動を合理的に実践し、楽しむためのベースとなる技能や知識 ・安全に運動を楽しむために必要な「協調性」「責任感」「マナー」「規律」などの行動の仕方 ・技能や知識を自己の生活に生かしていくためのマネジメント力 ・よりよい運動の仕方や健康に生活する方法を、筋道を立てて考えて行く力
技術	日常に溢れている技術を追求する力	・様々な技術（スキルやテクノロジー）の基となる原理を理解・体験する ・最新の技術（スキルやテクノロジー）は全て基となる原理の上に成り立っていることを理解する ・原理を基にして新しい技術（スキルやテクノロジー）へと創造する
家庭	日常の中の「生活力」～知・技・心～	・豊かな生活を送るべくミニマムエッセンシャルな生活に必要な知識や知恵、技能 ・習得した生活の「知や技」を基に活用・探究して育んだ生活に活かそうとする「心」（意欲や思いやり） *ここでのいう生活とは、衣・食・住・消費や環境・家族（子育てや介護）・地球の未来を考えた生き方全般
英語	外国語や異文化の学習を自ら進めていく力を養う	・コミュニケーション能力～理解し合う、伝え合う、表現し合う～ ・英語を聞く力、話す力、読む力、書く力 ・英語を通して様々な言語や文化を理解しようとする態度・姿勢

国 語 科

1 「探究の楽しさ」が駆動する学びを引き出す授業づくり

(1) 「探究の楽しさ」を通して深める国語科の学び

本校国語科では「場に応じて駆使できることばの力～言語文化の継承と創造～」を教科の軸と捉え、学びの場を創っている。その場に相応しいことばを考え、選びながら他者とコミュニケーションを取り、自己の考えを伝え、相手の立場を尊重して互いに理解しようとする姿勢は、社会生活において必要なことである。ことばは習得することで完結するのではなく、実の場で活用してこそ意味があり、そのことばは生きてくる。「駆使」することができて初めてそのことばが自己のものとなるのだ。

更に、脈々と受け継がれてきた日本語の使い手として、日本語特有の響き、美しさ、深さを感じながら社会の変化に応じて変わっていくことばに敏感であってほしい。そのためにはことばそのものに興味を持ち、ことばの変化や違いを知り、語感を磨き、語彙を豊かにすることも大切だ。国語科授業はその実践の場となるべきであると考えらる。

本校国語科が特に重視しているのは「ことばの力」である。自己を知り、相手を理解し、共生していくためにも「ことばの力」は欠かすことのできないものと考えらる。「ことばの力」を具体的に述べるならば、「ことばで伝え合い協働する」「ことばで感じる・想像する」「ことばで考える」「ことばを楽しむ」となろう。他者との多様な関わりの中でことばを駆使し、それぞれの考えや想いを伝え合う。相手のことばから様々な立場や心境を思いやる。物事を順序立てて考え、分析し、それを相手に伝えていくためにはことばが要る。ことばは時に場の雰囲気をも明るくしたり和ませることができる。ことばをもって自己の世界を築き、表現し、互いに受容し合うこともできるのだ。

(2) 「探究の楽しさ」を引き出す工夫

①必然性が感じられる言語活動

生徒にとってその学習課題や言語活動が、必然性が高くそれを成し遂げたいという思いが強いと、力が最大限に発揮され質の高い学習が生まれる。それを旨とするには「必然性がある」という中に、「課題が明確で、何らかの形になって表れるもの。」「意欲的に取り組める活動で、達成感があるもの。」という要素が必要であり、それには、何らかの表現活動を課題にすることが有効である。その際、うまく課題が達成できるような教師側からの演出や手引きの工夫も忘れてはならない。

②実生活につながる学習の場

実生活につながる学習を実現するためには、単元自体を実生活につながるものとして設定することが必要である。例えば、生活の中から話題を見つけて討論会を行う、学校や行事について案内や報告をするようなパンフレットや新聞作り、校外学習等でお世話になった方へ手紙を書くなどの学習活動が考えられる。読むことの学習でも、関連している記事や報道文と比較させるなど、生徒たちの生活との関わりを意識して読みを深めるように常に教師側で準備しておくことも必要であると思われる。

③自分の考えを出し合ってその違いに気づく場の設定

国語科の授業では、話し合いや討議によって読みを深めたり、表現活動をよりよいものにしたりにしていくことは重要である。授業の中で考えを出し合い、共有する方法には、クラス全体でのやりとりと、小グループでのやり取りがある。小グループでの話し合いがクラス全体への話し合いにつながり、そこに教師が、話し合いを支援・推進するファシリテーターとして参加するのが理想的な共有の場ではないかと思われる。

2. 実践事例

第3学年：「おすすめの作品を紹介しよう」（授業者：戸谷）

ア. 授業デザイン

【課題設定】

本単元は自分の愛読書（おすすめ作品）を他者に紹介することを通じて自己の読書生活をふり返り、本に触れるきっかけをつくり、さらには読書の幅を広げることを目標としている。作品を紹介する方法としてスピーチを行い、POPカードをつくることとした。作品を紹介するためには自分自身がもう一度作品の魅力を認識し、他者に伝えられるようにする必要がある。「面白かった」という感覚をより説得力を持って他者に伝えるため試行錯誤する過程を「探究の楽しさ」が駆動する場面と考えた。

【課題追究】

友達にも是非読んでほしいという思いをスピーチで「語る」（＝「耳を傾けてもらう」）機会を設けた。スピーチではあらすじや人物の特徴などを、聞き手を意識して分かりやすく述べることが求められる。またスピーチで互いの作品紹介を聞き合うことで感想を述べたり質問をしたりアドバイスをし合う、相互交流の場を設定した。またスピーチを踏まえて内容を吟味し直し、POPカードとして形ある「作品」にすることとした。

【表現・省察】

主体的、意欲的に生徒が作品紹介に臨むよう、次の3つの過程を経た。①他者のスピーチを聞いて「読みたい度（％）」をつけ、高評価だった生徒の作品紹介を図書室便りに掲載する。②つくったPOPカードを「卒業制作」として図書室に寄贈する。全員分のPOPカードを図書室に本と共に展示する。③POPカード鑑賞会を行い、相互評価を行う。高評価のPOPカードとその本を図書室入り口正面の目立つ位置に置く。（これらは全て本校図書室司書の協力の下、実現することができた。）

イ. 授業の実際（【課題追究】の場面の様子）

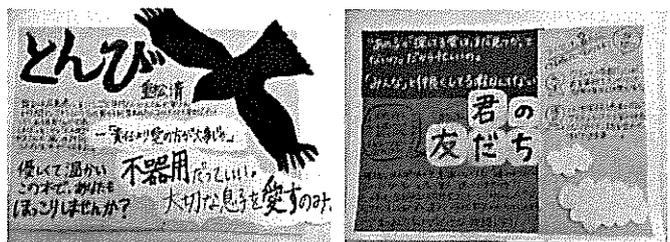
○スピーチをし、相互交流をしよう

スピーチを聞き合った後、小グループで意見交換の場を設けた。そこでは自分がつけた「読みたい度」をもとに「人物関係の説明が分かりやすい」「あらすじ部分が多い」などと意見を述べたり、「どんなときにこの作品を読みたくなるのか」「その作品が自分に与えてくれたことは何か」などについても伝え合う、相互交流の場を設けた。ことばを駆使して作品に対する思いを語り、他者のスピーチから工夫を学ぶことで選んだ作品の魅力を伝え切れたか考え、POPカードづくりにつなげた。

○他者を惹きつけるPOPカードを目指して ～キャッチコピーで惹きつけよう～

本単元では本校図書室司書に授業を担当してもらい（第2時）、人を惹きつけるPOPカードはどのようなものなのか、良い例だけでなくそうでない例を見せてもらいながら学んだ。その際今回作るPOPカードは卒業制作として図書室に寄贈することも合わせて伝え、POPカードで図書室利用者（＝生徒）に足をとめ、その作品（本）を手にとってもらうものにするために印象的なキャッチコピーやカードに載せるべき文章を考えた。POPカードづくりを契機とし、友達のでつくったPOPカードを読んで本を借りたり図書室に足を運ぶ機会が増えることで、実生活の中に生徒の読書活動が浸透していけばと考えた。

写真：生徒が作成したPOPカード
（市川・宗我部・寺井・戸谷）



社 会 科

1. 「探究の楽しさ」が駆動する学び」を引き出す授業づくり

(1) 「探究の楽しさ」を通して深める社会科の学び

社会科の学びを通して、自分たち自身とつながる様々な社会的事象に関する資料等を見て考え、また立場の違う多くの人々の意見も取り入れながら考え、その自らの考えを他者に伝わるように表現し、そして自らの行動へと主体的に繋げていけるような力をいかに培っていくべきか。

これに関してまず重視しているのが、昨年度までの開発研究で取り組んできた「探究すべき学習課題の設定」である。生徒たちが意欲的に探究しようと思える学習課題を設定してこそ、それまでの学習で習得された知識や技能、学び方を積極的に活用しようとし、その探究の過程において学びの楽しさを実感できるからである。さらに、自分たちと社会がつながっている喜びを味わえるような学習課題を探究することが、自ら主体的に社会の形成者として関わる姿勢を維持することにつながると考えるからである。

しかしながら、生徒たちにとって探究すべき学習課題を設定できたとしても、社会科の場合、その探究の過程の中で、課題に対する自分なりの解決を提示した時点で学習への関心・意欲を停止してしまう姿をしばしば目にすることがある。最初の「探究の楽しさ」で終わらず、それが駆動するためには、探究の過程の中で「なぜ?」「どうして?」という問いが生まれ、その問いが次の問いを生み出すような、つまり、自らの内側に問いが生まれるような学びを授業の中で保障することが必要なのである。

(2) 「探究の楽しさ」が学びを駆動する工夫

自らの内側に問いが生まれる学びを実現するためには、生徒自身が今まで以上に社会的事象に対して「わかる」という経験が必要である。浅い理解のままでは自ら問いを発することにも限界がある。自分自身がどこまでわかっているか、また、何をわかっていないか気づかせる機会が必要である。それはしばしば教師から示唆されることもあるが、中学生の場合、他者に対してわかりやすく伝えようとする経験、そして、他者が「わかった」あるいは「わからない」と応えることが、何より自分自身の学びを振り返る動機づけとなるであろう。

そのために重要になってくるのが、「課題の追究」および「表現・省察」における工夫である。

「課題の追究」においては、既習の基礎的な知識・概念・技能を活用しながら自分なりの考えをまとめていくが、実際は興味・関心、知識、思考力等の生徒間の格差もあり、課題を追究していけるだけの「わかる」の度合いもまちまちである。「課題の追究」過程において、単に個人だけで考えさせるのではなく、自分の意見をクラス内で発表させたり、4人ごとの学習班で話し合わせたりする機会を必ず設定することになっている。このような協働作業を踏まえることで、自分自身の理解度を自覚させるとともに、さらに自分の意見や考えの根拠を吟味させ、新たな問いが生み出されていくと考えるからである。また、他者とのやりとりを通して、課題追究の幅が広がったり奥行きが深まったりすることの楽しさを享受し合える関係の構築には、このような協働作業を継続していくことも欠かせない。

「表現・省察」においては、各学習班での意見の要点をクラス全体に見えるサイズの用紙にまとめて発表させることが多い。要点をまとめる作業を通じて、班のメンバーの考えを羅列するのではなく、話し合いの成果を生徒自身が理解することになる。また、様々な考えを可視化することでより新たな視点や相違点等に気づきやすくなり、自分の考えを再考しようとするだけでなく、自らの内側に次の新たな問いが生まれやすくなると思う。その意味では、生徒たち自身に用紙等にまとめさせ

ない場合でも、生徒たちの発表内容を教師側が工夫して教室全体に提示することが大切だと認識している。

2. 実践事例

第1学年「平安時代の法意識を探る～伴善男はなぜ有罪となったのか～」(授業者：寺本)

(1) 「探究の楽しさ」が学びを駆動するための授業構成

本授業の中で次の2つの課題を設定し、生徒に「探究の楽しさ」を実感させながら、学びを深化させることを試みた。

最初の課題は史料に基づいてこの事件がどのように解決されたか推察させ、当時の判断と比較させる。次に、「なぜ伴善男は有罪となったのか」という新たな問いを提示する。最初の問いが次の問いを生み出すための伏線となっており、もう一度全体を俯瞰しながら事件の構造を再検討する必要に迫られる。自分なりの意見を構築し直して歴史をとらえ、さらなる探究へと進む姿を期待した。さらに、単元全体の課題として「平安時代になぜ藤原氏はこれだけの権力を持ち続けたのか」という問いを示唆し、平安時代とはどのような時代であったのかつかませたいと考えた。

(2) 学習の概要

	主な学習内容と活動	指導上の工夫・配慮
課題設定	<ul style="list-style-type: none"> ○学習課題①：応天門の変はどのように解決されたのか、史料をもとに考えてみよう。 ○学習課題②：伴善男はなぜ有罪となったのだろうか。有罪となることで誰にどのようなメリットがあるか考えてみよう。 	<ul style="list-style-type: none"> ・絵巻物の読み取りから応天門の変の概要をつかませる。
課題追究	<ul style="list-style-type: none"> ○絵巻物の中の3人の訴えの場面の差異を読み取り、自分なりに解釈し、ワークシートに記入する。 ○平安時代になぜ藤原氏はこれだけの権力を持ち続けたのかという単元全体の学習課題につなげる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○課題追究を助ける手立て ・藤原良房、源信、伴善男を中心とする政治的な関係図と当時の文書史料を提示する。 ・絵巻物の訴えの場面をipadで提示し、史料解釈を助けるアドバイスをを行う。
表現省察	<ul style="list-style-type: none"> ○個人でワークシートに意見をまとめる。 ○班で意見をまとめて、クラス全体に提示しながら共有する。 ○個人でまとめた意見をもとに、本時の学習を振り返る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・個人の意見を班やクラス全体で共有化する手立てをとる。 ・単元全体の問いを示唆し、省察に活かせるようにする。

(3) 実践を振り返って

本授業を構想する過程で授業者が特に意識した点は、平安社会の特徴をいかにして生徒たちが実感を持ちながらとらえることができるかという点であった。生徒たちの実生活からかけ離れている平安時代の社会制度の実際の在り様を理解させるには、当時の人々の思考様式に思いを寄せ、実体的な社会認識を習得させることが必要である。そのために着目したのが、法規範や法制度に対する平安時代の人々の意識であった。法は古代から現代に至るまでその時代の社会状況や人々の思考様式を色濃く映している。現代の視点からの価値判断を行うことで、当時の社会への認識を深められると考えた。

この点は授業後の教科分科会でも話題の中心となった。当時の人々の法意識を現代人の視点で解釈

することが生徒の平安時代への社会認識を深めることにつながったかどうか、評価もふくめて議論していただいた。各意見を真摯に受け止め、歴史学習における法意識と社会認識のつながりについて、他の単元でも構想して自分なりに追究してみたいと考えている。

(木村・佐々木・寺本)

数 学 科

1. 「探究の楽しさ」が駆動する学びを引き出す授業づくり

(1) 「探究の楽しさ」を通して深める数学科の学び

数学科では、「ENDS（えっ、なぜ、どうして、そうなんだ）で始める数学」を目指して、授業づくりを行っている。つまり、「考えること」に楽しさを見出し、納得して、さらに次の疑問を見出せるようにしたいということである。これは、初めにある「なぜ」という思いが「わかった」に変わり、その「わかった」という喜びが次の「なぜ」につながり、次から次への学習の連鎖につながるという仮説に基づくものである。これこそ、「探究の楽しさ」が駆動する学びと考えるのである。

(2) 「探究の楽しさ」が駆動するための工夫

課題設定・課題づくり…多くの例からの帰納的な類推、友人とともに行う方法の検討、性質の発見。身近な題材、多様なアプローチが可能な題材、発展性や考えに広がりを持つ題材を選ぶ。

課題追究・発問の工夫…生徒の「なぜ」を生徒自身の力で解決するために、生徒の考えを引き出す発問を課題とともに練り上げ、課題解決の活動の間に、数学的見方や考え方のよさを体得することも意図している。それらに気づき、それらを活用しようとする態度を養う。

表現・省察・生徒が自分の考えを発表する場の設定…説明する中で理解が深まる。聞き手も、発表内容に疑問を持ったり、感動したり、発表生徒の論理に矛盾や飛躍がないか考えたりして生徒同士でふり返り・検証する。

- ・論理性の育成…式の活用によって、論理の組み立て・見直し・判断できるよさに気づく。
- ・ふり返りの習慣づけ…生徒にテストにおける誤答を訂正、生徒の反省・感想に対する教師のコメント（評価・励まし）。

学習の定着…確認テスト、ノートへの記録のあり方の指導：次の学習への土台をかためる。

2. 実践事例

(1) 第1学年：「比例と反比例の導入～小学校から中学校へ～」(授業者：大塚)

○本実践における「探究の楽しさ」が学びを駆動する工夫

比例と反比例の単元で生徒がより学びたいと感じるには、まず、いままで学習してきた小学校の既習の知識がどのように生かされ、どのように発展していくのか、実感を持って学習に取り組める授業の課題が必要であると考えた。本実践では比例と反比例の導入ということで、小学校の既習の知識である比例、反比例の変化の仕方を中心に確認した。次に、比例や反比例とは違う変化の仕方をする郵便料金の例をだすことで、生徒の「あれ？」という気持ちを引き出し、何が違うか比較していく中で、新しい知識である関数について学習を深めていった。

○学習の展開

	主な学習内容と活動	指導上の工夫・配慮
課題設定	○ 導入 一方が変わると、他方も変わるという2つの数量にはどのようなものがあるだろう。	・ともなって変わる2つの数量をたくさんあげることで、小学校の時に学んだ数量の関係を思い出させる。
課題追究	○ 本時の課題①の提示 縦25m, 横13m, 深さ1.2mのプールがあります。一定の割合で満水になるまで水を入れていきます。このとき、ともなって変わる2つの数量をいろいろ見つけよう。	・小学校でどのような内容を学んだか思い出し、中学校の学習内容につなげる。
表現・省察	○ 本時の課題②の提示 郵便物の重さと郵便料金の関係を考えよう。 ★「_____を決めると_____が決まる」に見方を変える。 ○ 本時のまとめ	・いつでも「変われば変わる」という関係ではないことに気付く。 →関数関係に見方を変えるきっかけとする。

○ふり返り

本実践では、小学校のときの学習内容を発展させる中で、生徒の「あれ？」という気持ちを引き出し、中学校での学習内容につなげていくことを目的とした。導入や課題①をできるだけ小学校での言葉に置き換えながら授業を進めたことで、生徒は小学校での内容をより思い出しやすく、授業の内容に入りやすかったようである。課題②では、生徒の「あれ？」を引き出すことはできたが、関数関係に見方を変えていく部分にやや無理が出てきてしまった。どのような題材を課題②として持ってくるのが有効であるか、関数関係を引き出すにはどのような発問が有効であるかが今後の検討課題である。

(2) 第2学年 1次関数の活用「正方形を重ねて並べてみよう」(授業者：松本)

○本実践における「探究の楽しさ」が学びを駆動する工夫

学習指導要領の中に「関数を活用し説明する能力を伸ばす」「関数的な見方や考え方をを用いて事象をとらえる態度を養う」ことが関数指導の意義であり、関数を日常生活や数学の具体的な場面で活用し、表、式、グラフを用いて表現し明らかになったことがらを他者に説明することで、その理解が一層深まり、関数関係を見いだし表現し考察することを通して、関数的な見方や考え方を養うようにする。

本時では、折り紙を重ねるところから、ともなって変わる数量を見いだしていく内容である。折り紙は生徒にとって身近なものであり、頂点、辺、角、面積などで考えやすく、多様な関係を見いだすことができるものである。多様な関係を班の中で発表するときに発表者と聴き手の観点を明確にしていくことで、思考をひろげていくことができる。また、図の中の変化するものと変化しないものの関係にも着目させ、1次関数とのつながりを持たせたい。

○学習の展開

	主な学習内容と活動	指導上の工夫・配慮
課題設定	<p>課題</p> <p>1辺が4cmの正方形の折り紙を対角線の交点に折り紙の角がくるようにつぎつぎと重ねていく。折り紙の枚数をx枚としたとき、それにともなって変わる数量yをできるだけたくさん見つけて、yをxの式で表しましょう。</p>	<p>・課題の内容のイメージがわかりやすいように、画用紙を使って示す。</p>
課題追究表現	<p>○個人から小集団への追究</p> <p>・個人で見いだしたともなって変わる数量について、どのような考え方で式を作ったかを発表しあう。</p>	<p>・$y = ax + b$の比例定数aと定数項bが何を表現しているか、着目させる。</p>

○ふり返り

1次関数の導入時に活用される題材を、1次関数の利用の前に実践した。1次関数の基本を学習したあとの実践だったので、多様な関係を見だし、対応表から式に表すことができた生徒が多かった。さらに、図の中で変化するものと変化しないものの関係と比例定数と定数項の関係を結びつけて考えることができていた。1次関数の関係になるものを中心に考え、1次関数以外の関係を考えた生徒が少なかったことが課題として残った。 (大塚・田口・松本)

理 科

1. 「探究の楽しさ」が駆動する学びを引き出す授業づくり

(1) 「探究の楽しさ」を通して深める理科の学び

理科において目指したいもの、身につけたいものを、端的に一言で表すならば「自然観を養う」ということである。ここでいう「自然」とは森羅万象を指している。理科の学習によって、自然と向き合い、読み取り、感じ、考え、自分のものとしていくことの積み重ねにより、自然観を養っていく。

自然という自分の外にあるものの理解を深め、自分とのかかわりで考えていくステップは、まさに探究そのものである。この探究を楽しみながら進めることで、理科における一連の流れがスムーズに進み、より良い自然観を養うことになるのである。

(2) 「探究の楽しさ」が駆動するための工夫

課題設定 生徒が、モチベーションを保ちながら追究、表現・省察をするに値する内容を示すため、可能な限り五感を用いて、大きなインパクトを受けたり、疑問をもったりする事物・現象を体験させたい。自発的に出る「なぜ」という疑問を探究活動の目的意識につなげていくことで、予想や仮説を立てたり、見通しをもって探究活動を構想していくことができる。

課題追究 個人で観察・実験の結果を分析・解釈することのみならず、自らの考えや他者の考えに対して、多面的、総合的に思考して検討・改善していく場面も意図的に入れている。基礎的・基本的な知識・技能を活用して観察・実験の結果などを分析し解釈することを通して自ら関わり、「気づく」「わかる」ことの喜びを得ると同時に、別の視点を加えることで生徒の気づきを深めていく。

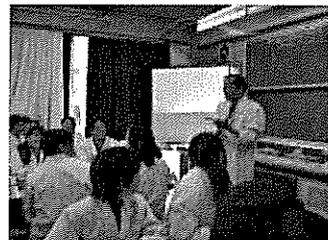
表現・省察 再度課題の事象を新たな目でとらえ直す。すると時にはその課題の解決が次の課題につながることもある。このようにスパイラルに探究活動を行いながら、自然観を磨いていく。

2. 実践事例

(1) 第2学年「市販のカイロは何がすごい？」(授業者：前川)

本年度の教育研究協議会で、「化学変化と熱の出入り」の学習として授業を行った。

市販のカイロをもとに、化学変化とそれによる発熱をコントロールする工夫について調べるために、市販のカイロや鉄粉に活性炭や食塩を混ぜたものなど、条件を変えて発熱の様子を調べ、異なる条件の結果を比較して考察した活動である。カイロに含まれる様々な成分が発熱に関係していることを確かめ、さらに企業のサイトによる解説を見ることで、商品に施された工夫に感心と価値を見出せるような自然観を養いたい。



①課題設定

生徒にとって身近なカイロを題材に扱っている。しかし、その仕組みを、カイロが発熱するときの内部の様子など、実際の中身を見ながらそれを確かめた生徒は皆無であろう。「身近だが、そういえばわからない」というテーマを設定することで、生徒のやってみたいと思う気持ちを促した。

②課題追究

鉄、活性炭、食塩などのカイロの各成分の役割を確かめるためには、各成分のうち一つ（たとえば食塩）があるものとないもので比較する必要がある。比較するものが多岐にわたると、多くの条件で実験することになる。そこで、クラスの8つの班でそれぞれ異なる条件での時間による温度変化を調べ、8つの条件による実験結果のどれとどれを比較して、何が分かるかを考えた。8つの結果から2つを選ぶ組み合わせは28通りあるが、どの組み合わせで何が分かるかを、生徒同士で検討する姿が自然にみられた。

③表現・省察

2つの実験結果を比較して考え、表現しやすいように、ワークシートの考察欄に、次のようなフォーマットを6個、用意して書き込めるようにした。右は記入例である。

<p style="text-align: center;">班と 班を比べると</p> <p style="text-align: center;">かどうかがわかる</p> <p style="text-align: center;">↓</p> <p>実験結果から</p> <p style="text-align: right;">とわかった。</p>	<p style="text-align: center;">(記入例) 3班と 5班を比べると</p> <p style="text-align: center;">食塩が関係するかがわかる。</p> <p style="text-align: center;">↓</p> <p>実験結果から</p> <p style="text-align: right;">食塩があると温度が上がるとわかった。</p>
--	---

今回の生徒による探究活動では、活性炭や食塩などの成分がどうやら「必要であるらしい」ということまではわかるが、どのようなはたらきなのか、ということまでは明らかにはならなかった。そこで、企業のサイトによる解説を用いて、それまでの探究活動と重ねることで、「なるほど」「わかった」と深く納得することをねらったが、研究授業では1時間だけであったので、この活動まで十分な時間をとることができなかった。

授業を参観した方からの意見として、子どもたちは興味関心が高まった状態で授業を始められ、前までの実験の喜びと自分たちが普段使っている物の関わりを知るといことで、探究の楽しさに繋がる有効な題材で、子どもたちが主体的に実験、考察に関わっていたように感じられた半面、実験から考察まで1時間で終わらせようとしたので、予想をする時間をもう少し確保したかったことや、各班の実験結果をどう共有するかの課



題が示された。

(2) 教員対象ワークショップ「ウニの観察キット」(提案者：渡邊)

11月に行われた教育研究協議会中、研究授業のふり返り前の20分間を使って、生物教材紹介のワークショップとして、お茶の水女子大学湾岸生物教育研究センターが小・中・高校の教員向けに行っている、発生実験用のウニ卵・精子提供プログラムを紹介した。

このプログラムは、発生の実験材料として、生きたウニではなく冷蔵庫で保存できる卵と精子、実験用の天然濾過海水を送付するものである。ウニ個体からの採卵・採精の必要がないため、発生実験の経験がない教員でも、添付された実験マニュアルを参照しながら比較的簡単に実験が行えるという利点がある。また、同センターのホームページにはウニの放卵動画、その後の成長の様子なども掲載されており、授業時間内に実験できない部分を補足するのに用いることができる。

授業時間が限られる中で発生の経過を観察させるのは難しく、受精の瞬間を観察させるだけでも実験生物を用いるとなると困難を伴う。卵と精子がすぐに使える状態で郵送され、希釈した精子を卵の入った海水に混ぜるだけで受精実験が可能となるこのキットは、発生実験をより手軽なものにできると考えられる。実際に手を動かしていた参加者は、説明を含め10分～15分程度で受精卵の観察を行うことができていた。

(菌部・前川・渡邊)

美 術 科

1. 『探究の楽しさ』が駆動する学び』を引き出す授業づくり

(1) 「探究の楽しさ」を通して深める美術科の学び

美術の学習では、描くことやつくることなどの表現活動が中心となるが、本校美術科では、鑑賞の学習を通して「見て考えること」を特に重視している。「見ること」とは、視覚を通して得た情報を脳が処理し解釈する活動で、日常生活ではこのことが無意識におこなわれているが、作品から受ける直接的な視覚情報以外に、歴史や文化などに関わる様々な要素が加わり、より複雑な分析や解釈が必要となる。また、それ以上に形や色、材質などの造形的な面から意識的にみることを通して視覚情報を整理し分析し、解釈することが必要である。これが「見て考えること」なのである。この「見て考えること」は鑑賞の活動だけでなく、表現の活動も含めたすべての造形的な活動を支える基礎となるだけでなく、これこそが「探究の楽しさ」を深める美術科の学びに通じるものであると考えている。

(2) 「探究の楽しさ」が駆動するための工夫

鑑賞の学習において分析的アプローチの手法で鑑賞することは、課題設定や課題追究など、探究して解決していくという学習の流れにそったものである。鑑賞学習のプロセスは様々な視点や解釈で捉えることができるが、一般的にそのプロセスは「見ること(鑑賞の感性レベル)」「知ること(鑑賞の知識レベル)」「考えること(鑑賞の思考レベル)」という三段階に分けられる。分析的アプローチでは、「見ること」の中の観察する行為や作品のあらゆる情報を入手して作品の鑑賞だけではわからない側面を「知ること」や、作品を読み解き、作者の表現したかったことについて「考えること」がこれにあたる。

鑑賞は、作品から受ける直観的な印象を感じとり、言語化していく感覚的アプローチの手法だけでなく、細部にわたって深く鑑賞する分析的アプローチの手法を取り入れることによって、造形的なよ

さや美しさなどの美的感覚を働かせつつ、対象のイメージや作者の心情や意図と表現の効果や工夫を味わうことで、より知的レベルの高い学習活動ができると同時に、知的好奇心を刺激し探究する楽しさを味わうことにつながる。

また、分析的アプローチの手法によって得た考えを、生徒一人一人が価値意識をもって発表し合うことで、共通点や差異などに気づき、新たな発見から導かれる認知活動によって創造的思考力が刺激され、創造的活動へと結びつけられるようになるのである。美術科の表現の学習では、イメージした事がアイデアスケッチや平面や立体作品という形で表現されて、各自の思いが視覚的に表現されているわけであるが、鑑賞の学習の場合、鑑賞物の鑑賞を通して感じた事は文字や言葉という言語を通して表現されるわけである。例えば「美しい」という言葉の中には「どのような美しさ」なのかということや何を伝えたいと自分の思いは伝わらない。自分の考える「美しい」ということを他者に分かるように説明していくことが必要である。その為にはお互いの思いについて時間をかけて交流させていく事で、自分の考えと他者の考えとの共通点や相違点をはっきりさせることで、自分が学習してきた事の省察を通して、価値観を形成していくことが大切であると考えられる。

2. 実践事例

第1学年「生活の中のデザイン ―デザインとは何か?―」(デザインの鑑賞) (授業者: 小泉)

(1) 課題設定

本題材は、これから中学校でデザイン(及び工芸)を学習していくために必要な「デザインの意味」について理解することを目的とするデザイン学習の入門的な要素の強い鑑賞の題材である。「デザインとは何か?」という問いから、デザインという言葉の意味だけでなくデザインについての考え方や、身近にあるデザインの鑑賞を通してデザインの本質的な価値について気づかせ、理解を深めさせていくものである。今回取り上げたプロダクトデザインは、機能や造形的なことだけでなく、生産性、価格、流行、嗜好(好み)といった様々な事柄を含んでいるために、そのモノが持つ本質的な価値を見極めにくいといえる。だからこそ、自分にとって「モノ」の価値とは何か? デザインと機能、デザインと形態など、デザインを構成する要素を理解し、自分の価値意識について考えさせる授業である。

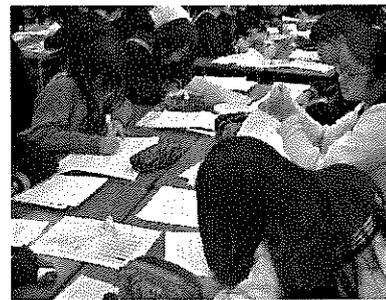
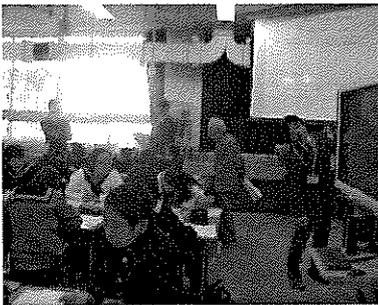
(2) 課題追究

鑑賞における「見る(観る)」という活動は、ただ漠然とモノを「見る」という日常的な見方から、形や色、材質、などの造形的な観点や、デザインの鑑賞においては機能性といった観点も含め、視覚的な情報を整理分析し、比較するなど、価値意識をもって解釈することである。本授業では芸術作品とは異なり、自分のお気に入りのものや、愛着のあるものを鑑賞対象にすることで、題材に対する興味関心を持たせることに繋がる。また、他者にそのモノのよさを紹介する活動(プレゼンテーション)は、自分のなかにある無意識な部分を意識化させることであり、言語化していく力を養うものと考えられる。

今回の授業では、鑑賞に際してレーダーチャートを使った鑑賞方法を導入した。レーダーチャートを活用することで、生徒が観察物を鑑賞する際の観点が明確になり、生徒が鑑賞したことをお互いに発表するときには比較しやすい効果がある。レーダーチャートの評価項目は、①形(形態)②色や模様(形態)③持ちやすさ(機能)④使いやすさ(機能)⑤材質 ⑥価格の6項目は同じ評価項目にして、⑦に「個人設定項目」を設定することで、鑑賞するモノを各個人がどのような見方をしているのか、それまで無意識におこなっていた鑑賞の視点を意識化させることにつながると考えた。

(3) 表現省察

授業では、鑑賞物に指定した文房具（シャープペンシル）を実際に手にとって、評価項目に沿って触ったり使ってみたりすることで、見ただけではわからなかったことに気づくことができた。特に個々のシャープペンシルが持っている様々な機能や、持ったときの感触、実際に文字を書いてみたときの書き味、そしてデザインなど、生徒各自の感覚的な部分をレーダーチャートに沿って視覚化することができた。お互いの考えた事の比較がしやすかったということがワークシートの記述からも見とることができた。鑑賞評価については項目が多すぎてじっくりと鑑賞するゆとりがなかったことから、評価項目をもう少し絞り込む必要があった点は反省としてあげられる。また、ワークシートを使って鑑賞したことなどを記述することは、自分の考えをまとめていくことには繋がるが、生徒はレーダーチャートへの記入や感想などを書くことに手一杯になってしまうため、プレゼンなどお互いの意見交換しながら深めていく活動が少なくなってしまうなど、話し合いの時間を確保していくことも課題として残った。



(小泉)

保健体育科

1. 「探究の楽しさ」が駆動する学びを引き出す授業づくり

(1) 「探究の楽しさ」を通して深める保健体育科の学び

本校の保健体育科では、「身体を自発的に育て、運動を通して自己実現を図る力」の育成を教科教育の軸と捉えて授業実践を重ねている。この力を育むためには、教師からの一方向的で効率的な伝達によって技能や知識を獲得するだけの学習では十分ではない。生徒が自ら身体活動を行う中で課題を発見し試行錯誤しながら知識や技能を獲得したり、課題の解決に向けて既習の技能や知識、情報を活用し、仲間と協力しながら解決策を模索していく「探究」のある学習を積み重ねることで運動を自ら楽しもうとする力や、運動を生活の一部とし、生涯にわたって親しんでいく基盤を築いていくことができる。と考える。

(2) 「探究の楽しさ」が駆動するための工夫

保健体育科では、成果物として文字や作品などが残らない身体活動が学習の中心となる。起こっては消え自分の目では直に見ることのできない身体活動の中で、既習の技能・知識や他者からの情報などの手がかりを基に、自ら学び自ら考える楽しさを引き出すために、以下に示す点に留意して授業を実践した。

①課題設定

・魅力的な課題、教材を提示する

②課題追究

- ・生徒が習得した技能や知識を活用して、創造的に取り組む活動を取り入れる
- ・小グループでのディスカッションや見せ合いなどの活動を意図的に設定し、支援する

③表現・省察

- ・発表とフィードバックの機会を効果的に設定する

2. 実践事例

(1) 第1学年「ダンス」 題材「しんぶんし」 (授業者：佐藤)

ダンスの単元では決められた動きを効率よく、正しくできることが必ずしも学習の目標とはならない。学習のゴールが点数や記録、型ではないからである。だからこそダンスの単元において大切なことは生徒の持つ多様なイメージやアイデアを引き出し、それらを引き立てる動きへと発展させていくことである。これは、教師からの一方向的な指導だけでは成し得ない。生徒がダンスの世界に浸り、自分のイメージをより表現できる動きを自ら模索し、自分なりの表現を創造していけるような工夫のある授業でなければならないと考える。本実践では、生徒が主体的に表現を模索する創作活動にスムーズにつながっていけるように、1時間の学習活動をダンスウォームアップ、課題の理解、イメージと動きの共有、グループ創作、見せ合いと意見交換の5つの段階に分け、学習課題が変わっても単元を通して同じ流れで授業を展開しながら、スパイラルに学習を積み重ねる方法をとった。また、授業の導入からまとめ、単元の前半から後半にかけて、教師主導の関わりから生徒主体の関わりへと徐々に切り替えていけるような課題の配置や創作活動の配置に工夫し授業を実践した。

①課題設定

生徒が「何をすればいいかわからない」状態に陥り学習が停滞しないように、毎時間学習すべき課題は変わっても、単元を通して教師主導の活動から生徒主体の活動へと段階を踏んだ展開で授業を実施すると共に、毎時の課題となる運動技能や創作技能を生徒に示し、表現の中でも達成すべきゴールを明確に設定して授業を実践した。本時の課題「しんぶんし」では、新聞紙の動きの特徴を捉え、その動きを模倣しながらオリジナルのひと流れを創作することを課題とした。

②課題追究

最初は教師の動かす「しんぶんし」というものの動きを手がかりに、自分の動きを見つけていくが、それをヒントに2人組になって、ゲームのように動きを発見する活動を行った。教師の「ダイナミックに体を使うように」という声かけを受けて身体を大きく使う体験を重ねると共に本時のキーワードである「ひと流れ」を通して踊ることで、それぞれの2人組が独自のダンスを創造することができた。

③表現・省察

この授業では、ペアになったグループで作品の見せ合いを行って、互いのペア作品を具体的な評価をしよう活動を入れた。また、その内容を含めて自分の動きなどについてカードに簡単にふり返らせた。学習カードの記述では、自分のダンスがダンスキーワードを意識したものになっているか、仲間のダンスのどこが良いかについて考えさせた。

(2) 第2学年「柔道」「2人組の受け身で安全を考えよう」 (授業者：宮本)

今年度から中学校1、2年生で必修となった「柔道」は、とくに安全の確保について多くの議論が起こっている。安全確保のために一斉指導で受け身を中心とした体のこなしを習得することに時間をかける授業のイメージを持つ場合も少なくないが、本校ではむしろ生徒に柔道の体のこなし方や技について探究させる過程に重点を置いた学習を実践している。

課題をどう設定するかを工夫し、生徒がグループの中で活動を止めないで、運動しながら観察し合

い話し合う事ができるような活動方法を、生徒に伝えることにより体育ならではの「探究的な活動」を狙っている。公開は単元4時間目初めて2人組の受け身を行った授業である。

①課題設定

初めて、2人組で受け身をとる授業となる。確実に実行すべき基本的な事として取りは引き手を離さないこと、受けはつり手を離さないことによって、安全については双方が責任を持って行う事は実際に動いて確認をする。その上で「二人組の受け身はこれで完璧」を目指すことを課題として示した。

②課題追究

班の中で、ペアの受け身を見合って、どうすればより安全が確保されるかを指摘し合う活動から始めた。教師は活動の停滞していそうな班からまわって、共に動きながら、ヒントを出し探究活動が進むように援助した。出たアイデアを極力褒めて楽しく探究できる空気を作った。

③表現・省察

班毎に実演をしながらの発表を行い、各班の意見を総合して教師がある程度の方向を示した後に、再度実技で試すと言うことでより深い理解と技能の定着を促した。カードの記述には「しっかりふんばって倒れない」「投げないでやさしく」「タイミングがとても大切」「首を起こすのを忘れないように」など、自分と相手の具体的な行動の仕方を記述できているものが多かった。発表を聞いた後の受け身が数段上達していたという観察者の指摘もあり、発表による共有は効果があったと考えられる。

(宮本・関根・佐藤)

技術・家庭科（技術分野）

1. 「探究の楽しさ」が駆動する学び・授業づくり

(1) 「探究の楽しさ」を通して深める技術科の学び

技術科において学びの軸となる力として「追求力」がある。現在の環境を構成する技術は全て過去から存在している技術を発展させたものである。技術は常に新しいものが生み出されているが、その根底となっている技術は変わらずにいる。基礎となる技術を知り、技術の発展の流れを知り、より優れたものを追求していく事こそ技術科が養うべき力だと考えている。

技術科は実技を中心に据えた授業を計画しているが、実際の授業ではこの実技の根底を支えている知識・理論面こそを重要視している。その理由としては技術科における「探究の楽しさ」の一番大きな要素として『「以前よりうまく」できる』ということが挙げられる。ある課題に取り組む場合、ほとんどの場合において同じ、もしくは似たような作業を複数回行うことが多い。そこで以前行ったことのある動作と同じ動作を行う場合、以前行った動作に対して自分なりの修正を施してもう一度同じ動作を行うことで、以前よりも楽に、素早く、うまくできていることを生徒が体感することができる。この以前の自分よりもうまくなっている自分に気付く回数を重ねることにより、自分の技術を昇華させることができたのを実感する場面こそが、生徒が技術科における「探究の楽しさ」を感じるができる瞬間であると考えている。

この「探究の楽しさ」に生徒が気付くことにより、ひとつひとつの動作に対して、「次は〇〇を取り入れてみよう」「××を行えばもっと精度が上がるのではないか」など課題を持って取り組むことができるようになる。そしてそれぞれの課題に対してどのような結果が表れるにせよ、そのことを糧にして『よりよい』ものへと昇華させることに意欲を持って取り組むことができるようになる。この

小さな課題設定と解決を繰り返していくことで、『よりよい自分』＝『イメージとして考えている理想の自分』に近づくことができる。また同じ動作だけでなく異なる動作を行う場合においても、例えば電子工作と農作業を比較した場合、それぞれ作業を行う姿勢は対象に対して正面に立ち、背筋を伸ばして上体を起こし、近すぎず遠すぎずの距離を持って、肘を軽く曲げた動かしやすい姿勢を取る必要があるなど、基本的に根底をなすものは広い分野において共通している。そのため一見全く違うものと捉えていたものに対して以前に取り扱った事のあるものとの共通点を見つけることも「探究の楽しさ」を感じる場面である。

「探究の楽しさ」を感じる場面を積み重ねることにより、課題を一区切りとして自分の成長を認識して、もっとできることがあるのではないかと、もっと成長したらどうなるのか、といった意欲が次の課題に対する意欲となり学びを駆動させる原動力となっていくと考えている。

技術科は今回の指導要領の改訂において非常に大きな変化があり、今までと授業時数が変わらないまま、必修範囲として学ぶべき内容が増えたため、以前よりも効率的に授業を進めていく必要性が出てきた。そのため今まで以上に他の領域や他教科との繋がりを意識して、一つの課題に対して複数の領域の要素を織り交ぜることで以前と変わらない時数でも、以前より濃い授業をつくっていく必要があると考えている。この他領域、他教科との繋がりに生徒が気付くことによって、新しい領域に入る場合などにおいても生徒が高い意欲を持つことができるようになると考えている。

(2) 「探究の楽しさ」が学びを駆動するための工夫

(1) で「探究の楽しさ」が生まれる場面について述べたが、ほとんどの場合において課題設定を完了した状態で行動を起こす必要がある。その課題設定こそが生徒にとって一番の難点だと考えている。そこで可能な限り課題を細かく設定し、生徒が課題に数多く取り組むような授業計画を立てている。一定の授業時数の中でのなるべく多くの課題を解決できるように計画することにより、課題設定とその解決が円滑になる『2回目以降の課題』数を増やすようにしている。そのように授業を進めることで一つ一つの行動にどのような意味があるのかを生徒自身が見出しやすくなることで、より学びを駆動するための燃料となる意欲をより高めることができると考える。

また多くの課題に取り組むことで生徒自身が自分の成長を実感できる場として、省察の機会を設けることで、学びをより円滑に駆動させることができると考えている。

2. 実践事例

題材名：生物育成に関する技術『栽培に関する技術とその評価の視点』（授業者：平地）

公開研究会の授業実践では、「技術の評価」をテーマにした授業を行った。しかし「技術の評価」と一言に言っても実際に評価するためには、その様々な観点で評価したうえで総合的に評価を行う必要がある。しかし生徒にはまだ個々の観点がしっかりと定着しておらず、また個々の評価をとりまとめる能力も十分に身につけていないため、「技術の評価」を十分に行うことが難しい。そこで生徒にもわかりやすいように「技術の評価」の尺度を金額で表す「技術の評価」を行う授業をした。

【対象】第一学年

【授業概要】

事前学習として、栽培で行ったサツマイモの収穫の際に商品として売り出すことができる個数と、売り出すことができない個数を原因別に数えさせた。

授業では売り出すことのできるサツマイモ一個あたりの値段を設定し、全部売れたと仮定して元々の収穫でいくら稼ぐことができたのかを具体的な金額で評価させた。その後、収穫の時の班ごとに新

しい技術として新しい肥料や栽培方法の見直しなどによって、どの程度商品としてのサツマイモの数を増やすことができるかを考えさせた。その後各班の意見について生徒で話し合いを行うことで実際に商品として売り出せるサツマイモの個数の調整をした。そして初期の状態の売り上げと比較することで、それぞれの技術を金額で評価したのち、それぞれの諸費用を考えて最終的な収支を出させて、新しい技術を総合的に捉えた場合にプラスになるのかマイナスになるのかを考えさせた。

【成果と反省】

「技術の評価」を金額で判断させたのは生徒自身もイメージしやすく「そんな方法があったのか」や「そういう考え方は思いつかなかった」など個人で考えるよりお互いの考え方をシェアすることで、新しい考え方があることを理解することができていた。また評価自体も自分で考えるだけだとあり得ない金額として評価してしまうが、意見交換をすることで自分の評価が適切であったかどうかを見つめ直すことができ、自己が行った評価も正しく修正することができたと思う。また評価を金額という具体的な数値に表すことで、班内の話し合いでもより高い評価を得られる方法をお互いに意見を交換しながら「より良いもの」を作り出していくことができていた。

技術の授業を重ねてきて、ある程度自分の中で技術を捉える力が養われていれば「技術の評価」を観点ごとに評価していくこともできるが、1年生のはじめの時期のようにまだ技術を上手く捉えることができていない状態では、「技術の評価」をそのまま行うのではなく、生徒がイメージしやすくかつ数値で表すことができるもので行うことで、生徒も明確な目標が立てやすくより高い数値を目指して改良を行いやすくなるものとする。

今回の実践の反省としては、ゆったりと時間をとることができず議論を十分に重ねることができず、クラス全体での評価の共有と精錬が足りなかったこと。もう一つは「技術の評価」としての金額化を行ったが金額だけに目が行ってしまい作り手としての技術の活用から、売り手としての技術の活用に言ってしまった生徒がいた点を直していくことで今回の実践を有効に利用できると考えている。

(平地)

技術・家庭科（家庭分野）

1. 『探究の楽しさ』が駆動する学び』を引き出す授業づくり

(1) 「探究の楽しさ」を通して深める家庭科の学び

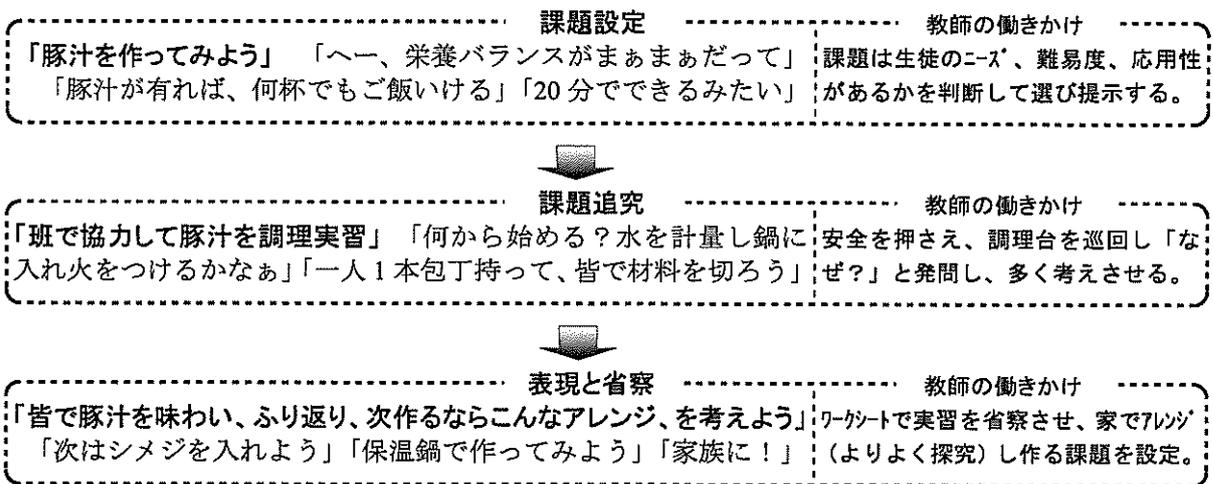
家庭科では「生活」をキーワードに、「知・技・心」を体験的な楽しい学びを通して育てている。

「知」とは知識・知恵、「技」とは技能・技術、「心」とは創意工夫・意欲・共感と考える。情報として基礎・基本の「知」や「技」は、実生活の場で活用・探究を繰り返すことで、定着し、更に広がっていくものであろう。授業では、応用し活用できる内容（ミニマムエッセンシャル）を、主体的・体験的・探究的に学ばせる工夫をしている。

(2) 授業づくりの考え方と引き出す工夫（家庭生活に活かす、体験を伴った小さな探究活動から）

実生活の場で活用・探究を繰り返すには、やる気という「心」が大切で、①探究する課題は負担が大きすぎないものを設定する。②家庭での課題実践では「少し苦勞したけれど周りの家族が喜んだから、また、やろう。」となるような仕掛けを組む（例えば、ワークカードに保護者からのコメント欄を設ける）③クラスメートから、評価を受ける場を設定する。④日常的になぜ？と問いかけ、「よく考える」を確認する。

次に食物領域の学習を例に、「探究の楽しさ」が駆動する学びについて述べる。



- 課題設定 (一人で家でやってみよう) → 課題追究 (一人でやって基礎・基本の学びが定着)
 → 表現と省察 (家族に食べてもらい自己効力感が高まる) → 課題設定、追究、表現と省察 (他の料理にもチャレンジ、家事全般にも) → . . . (略) . . . スパイラルな学び

➡ **楽しみながら探究し、学びが駆動した結果、自己効力感や生活力がアップ**

昨年度に引き続き「探究の楽しさ」について、授業実践研究をしてきた。それはその前から取り組んでいる習得・活用・探究が底流にある。基礎・基本を習得するには座学の授業だけではなく、実生活で活用し探究するきっかけとなる家庭科の授業を引き続き実施していきたい。ハードルが高すぎない課題で生徒が体験的に学び、生徒が考えるよう教師は上手に働きかけ、お互い楽しいと思えるような授業作りを、実践・検証していく。(参考までに、生徒の興味関心等、調査結果の一部を示す。)

＜食物関連アンケート調査の結果から＞

調査日：H24年6月実施 対象：中学2年生 人数：男39名 女89名 合計128名

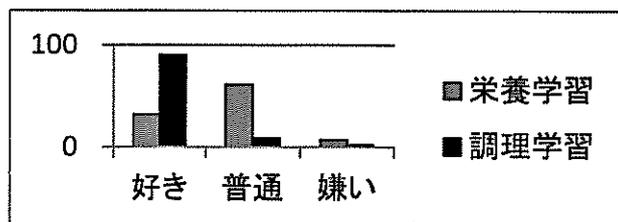
調査目的：①栄養学習と調理実習の学習に対する生徒の興味関心の実態を比較する。

②探究を支える「基礎基本」を定着させる一つの工夫への評価を探る。

(調理実習授業前、事前指導としての、春休み課題『ジャガイモ皮むき』)

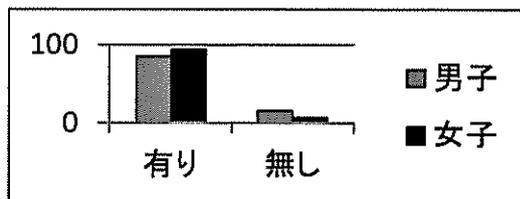
＜学習への興味＞ (%)

	好き	普通	嫌い
栄養学習	32.0	61.0	7.0
調理学習	89.8	8.6	1.6



＜春休み課題の効果＞ (%)

	有り	無し
男子	84.6	15.4
女子	93.3	6.7
平均	89.0	11.0



<結果の一部>

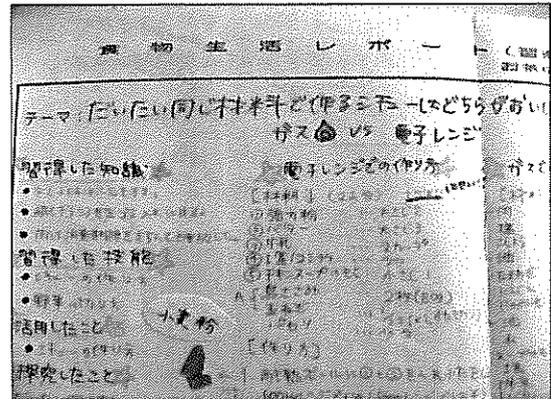
調理の学習は、興味関心が高く、約9割が好きと答えている。調理に絡めた栄養学習が有効である。また、約10回の調理実習前の春休みに、ジャガイモ皮むき6個以上とそれを使っての料理を宿題とした。基礎・基本技能の定着を意図したが、約9割が効果有りとして自己評価している。より安全に、ニーズのある楽しい調理実習授業を今後も実践していく。

2. 実践事例 第2学年「食物学習」(授業者 栗原)

- 対象：中学2年生 ●単元：食物学習
- ねらい：消費環境（自然・人）や健康を意識し、自分の事として考え実践する姿勢を育成する。

●時間数：合計30時間

- 授業の流れ：①「なぜ食べる？」(気づき・思考) → ②栄養(知識・習得) → ③約6回の調理実習(学習課題設定、思考、技能習得) → ④家で、アレンジしてやってみよう(意欲を高める) → ⑤実技テストに向けてスキルアップ(技能習得) → ⑥環境を考えた調理(思考・技能習得) → ⑦食物生活レポートの発表(活用・探究・表現・省察) ★本時 → ⑧学習の振り返り(省察)



↑ 食物生活レポート

●本時(★⑦)の位置づけ：

学習を基にしたクラスメートの探究レポートを皆で共有し、省察に繋げる。

●本時の流れ：

	学習場面	活動内容	「探究する力」を育む要素
事前に (課題設定追究)	導入	本時の流れ、ねらいを知る	昨年実施した生活レポートを参考にする。
課題発表表現	全体発表	生活レポート	全体で発表・表現。
表現省察	全体で意見交換	全体発表を聞いての感想をまとめ発表。	全体で省察する。
省察	個人でのまとめ	本時の感想と、ふり返った意見をワークシートに記入する。	個人で省察する。
省察	まとめ	全体で感想を共有する	今後も実生活で活かし、更に探究していくことを確認する

●考察：既習の学習を活かせ、生徒がより楽しく探究や発表の活動をした様子が見えてきた、と考える。興味関心のある食物領域での、今後の実生活での活用や探究や応用が期待できる。また、その体験をきっかけとして、身の回りの生活全般(家事)に関わって欲しいと考える。

(栗原)

英 語 科

1. 「『探究の楽しさ』が駆動する学び」を引き出す授業づくり

(1) 「探究の楽しさ」を通して深める英語科の学び

英語科では学習の軸を、基礎・基本の習得、コミュニケーション能力の向上、英語を通じて行う様々な言語や文化の理解、の3つと考えている。母語から離れて外国語を習得していく過程は、訓練と時間を要するが、授業づくりの数々の工夫次第で、3年間の英語学習をより楽しく達成感を持てるものに行うことができる。

(2) 「探究の楽しさ」が駆動するための工夫

発表学習などでは生徒同士の英語による質疑がより良い表現を生み出す場面を意図的に仕組んだり、ALTの活用に代表されるように英語を使う必然性を感じる場を設定したり、継続の蓄積が目に見える形にして評価される喜びを味わわせたり、発達段階を考慮してゲーム感覚で楽しく競い合える設定にしたり、学習用の教材ではなく、生のままあるいはそれを加工したものを提示して、生きた英語に触れさせることでより高い動機を導き出したり、などである。

すべての語学学習は、相手とのコミュニケーションを第一目標にしていると言える。基礎・基本の習得はそのためにあり、様々な言語や文化の理解もそこから派生していく。まずは自ら表現してみて、相手からリ spons を得られれば、さらなる表現をしようとする。その過程では自分の表現を省察する機会も得られ、より豊かなコミュニケーションを求めて、自ら課題を設定したり、探究的な姿勢で努力をしたりもする。また、自分の学習過程自体をふり返る機会も得られる。そういった学習を可能にするのが教室である。こと、語学学習に限って言えば、自分の中だけの閉じた学習にはあまり意味がない。コミュニケーションをはかり、互いに学び合うことから、自ら学習の課題を設定したり追究したりする動機も生まれるからである。それはひいては、自律的で自立した学習者を育てることに繋がり、卒業後も英語学習を継続したり、他の外国語学習を始めたりする原動力となる。

2. 実践事例

(1) 第2学年：The 3Rs in Germany and Japan（授業者：加藤）

①本単元の概要

本単元は、ドイツから来た転校生が日本語の「もったいない」という言葉に感銘を受け、同級生にドイツでの3R (Reduce, Reuse, Recycle) の実例を紹介し、それに対し日本人生徒が日本の3Rの実例を紹介するという教科書の題材を扱う。「もったいない」という発想から自分たちの身の回りの「もったいないもの」について改めて見つめ直し、その無駄を無くすための解決策を自ら考え表現する。

②本単元のねらい

この課の新しい言語材料である Why ~? Because ~ を用いて理由を尋ね答えることを含め、2年生で学習した I think that ~ や助動詞、前課の新出事項であった不定詞等を用いて、3Rの視点で身の回りの課題について自分の考えを伝えることをねらいとした。そして、活動を通して既習事項を使って実際に表現できていると生徒自身が実感できるようにしたいと考えた。また、身の回りの「もったいないもの」についてふり返り、無駄を無くすための解決策を考える機会を通して、環境問題についての問題意識を高め、自ら身近な課題として捉え解決しようとする姿勢が養われることを期待した。

③本単元における「探究の楽しさ」が学びを駆動する工夫と生徒の反応

i. 課題設定

教科書の内容を理解するだけにとどめず、身の回りで「もったいない」と思うような無駄なものは無いか考え、課題を見つけ、どんな解決策があるか3Rの視点でオリジナルのアイデアを考え話し合う過程の中で探究的な姿勢を養いたいと考えた。教科書に載っている3Rの例以外の実例も提示し興味・関心を高め発想を広げられるように工夫した。生徒からは、先進的な例や独創的な例、意外と簡単に取り組みそうな思いがけない例などに感心したり驚いたりしている姿がうかがえた。

ii. 課題追究

自ら課題を見つけ出し解決策を考えていく中で、生徒の様子は、家庭での工夫など身近な取り組みを挙げたり、どんな無駄があるだろうかとあれこれ考え、どうやったらそれが解決できるのか知恵を絞り出そうとしたり、既習事項を駆使して英語で表現しようとしたりする姿が見られた。途中段階でペアで発表し合う場面では、解決策について意見を伝え合ったり、英語での表現に苦慮する生徒に教え合ったりしていた。

iii. 表現・省察

発表では、それぞれの発想豊かなアイデアを知り、互いの独創的な発想や英語表現を共有し認め合うことを通して、表現できたという実感を持ったり、課題意識を持ち、課題追究し、表現することの楽しさを感じることができたようだった。

(2) 第3学年：「考え、表現する～『アンネの日記』を題材に～」(授業者：中島)

①本単元の概要

簡単な英語で書かれた『アンネの日記』を教科書で学習した後、その理解をさらに深めるために、ペーパーバック版のものを読み、課題について個人およびグループで考え、自分の意見や思いを表現する。

②本単元のねらい

自分たちと同年代の彼女が考えたことや、どのような状況にあったのかを読み取り、理解しようとしたり、「戦争」の持つ意味やそれがもたらすさまざまな事象や状況について考え、自らのことばで表現しようとしたりすることをねらいとした。また、『アンネの日記』およびその時代背景・歴史などに興味を持ち、自己の設定したテーマの探究活動(自主研究など)へとつなげるきっかけとなることも期待した。

③本単元における「探究の楽しさ」が学びを駆動する工夫と生徒の反応

i. 課題設定

本単元では、中学校の3年間で学習してきたことを活用し、原典を英語に訳した『アンネの日記』にふれる中で、高度な学習にチャレンジしているというところに「探究の楽しさ」を見出すことを期待した。生徒は、自分なりの方法で意見交換を行うための準備をした。最低2時間は和訳(先渡し)に頼らずに辞書を用い、当時の状況がわかる記述や自分が印象に残った記述にはアンダーラインをつけたり、自分が考えたことや感じたことをメモしたりして、各自が課題を見出し取り組んだ。生徒たちのプリントをみると、びっしりと課題学習の跡が記されており、「自律的な学習者」への一歩を踏み出したように感じた。

ii. 課題追究

自分なりに課題を見出し、取り組んできた学習をもとに、グループでの意見交換などを通し、さらに内容への理解を深め、お互いに考えを深めていく中で、「探究の楽しさ」が学びを駆動することをねらった。生徒たちは熱心に他者の意見や考えに耳を傾けたり、自分の考えを述べたりする中で、課題へのアプローチをより深め、追究する姿勢を高めることができたようだった。他者の意見や考えから得られた気づきは、学習者の学びをさらに深め、変容させるものであった。

各教科にも「思考の道具」「問題解決の道具」となり得る考え方の指導があるだろう。「思考力の育成」のために、各教科の実践知の中に埋め込まれた「思考の型の指導」を可視化していく形で研究を進めていきたい。

3. 秋以降の論理的思考の指導実践事例：2年国語・理科 「どの生物を守るべきか ―絶滅危惧生物の保護を考える―」

(1) 授業の概要

絶滅が危惧される生物種を保護する必要があるが、すべての絶滅危惧種を守ることは、該当種の多さからも、経済的な面からも難しい。

そこで、災害医療で導入されるトリアージ*の考え方をこの問題にあてはめる動きがある。どの生物を助けるべきかを考え、それをもとに生物多様性の考え方などを補足する学習を展開してみた。学校司書の協力により、絶滅危惧種の図鑑や、生物多様性に関するテーマの書籍を多数用意した。それにより班ごとに異なる資料を調べながら議論した。*トリアージ：最善の救命効果を得るため、傷病者の治療の優先度を判別すること。



(2) 論理的な思考の場面

生徒が考えたり判断する場面では、「なんとなく」などでなく、きちんとした理由付けを促した。

例：「どんな生物種を優先して助けるか」を考える場面

「絶滅したら困る」という点は共通でも、救うべき生物として「その生物が絶滅すると、生態系の影響が大きい生物」「人間に利益を与える生物」「人気がある生物」等のアイデアがみられた。

個体数との関係については、「早く助けないと絶滅してしまうので、個体数の少ない種から助けるべきだ」「個体数が多い方が救いやすいので、個体数の多い種から助けるべきだ」という真逆の意見が出た。また、災害医療のトリアージにならって、個体数500未満が「黒」（絶滅、処置なし）、500以上1000未満が「赤」（最優先で保護）、1000以上3000未満が「黄」（「赤」の次に優先）、3000以上5000未満が「緑」（保留）というアイデアもみられた。

(3) 授業を振り返って

中学2年生にとってはなかなか難しいテーマで、考えるもとになるデータも限られているため、「裏付け」を調べて論じることはできなかったし、また「理由付け」についてもこれまでの生活や学習経験の範囲での論理構築となったため、結論めいたものはできなかった。しかし、社会での問題解決においては、似たような状況に迫られるケースもある。「正解」がないテーマだけに、安直に答えを出すよりも論理的に考えることで、問題の大きさを感じ取ることができたととらえている。

4. 全校（全教科・自主研究等総合領域）での取り組みの提案

論理 WG では上のような検討・事例をふまえ、以下の二点を提起してまとめにかえたい。

①授業や学年指導の各場面で、次の各点を意識して取り組む。

- ・根拠と理由付けと主張の三つを述べて考えを述べることの徹底。

例 生徒が自分の考え・意見のみ述べた →根拠と理由付けを問い直す。

根拠を示したが、どうして主張につながるか述べていない →理由付けを確認する。

※特にある話題について「説明」する「意見を述べて話し合う」などの言語活動場面で意識して指導を徹底していく。

- ②「聞き型」を初めとした「思考の型」のさらなる整理と指導のポイントの共有
・来年度の研究WGとして「論理的思考・表現」のワーキンググループを設置して継続。
例 各教科・各先生が指導している思考のツールを整理する。
自主研究のポスターに何をどう書けば分かりやすいか等。

- 【参考文献】・内田伸子『想像力—創造の泉をさぐる』講談社現代新書1994
・井上尚美『思考力育成の方略』明治図書1998
・M. ネイハイス「どの生物を守るべきか」『日経サイエンス』2013年1月号, pp.76-81
日経サイエンス社 (宗我部・田口・寺本・前川・牧野)

探究の楽しさと話し合いの力

1. 『探究の楽しさ』が駆動する学び』と話し合いの力

①話し合いの有効性

「話し合い」が協働して学ぶ過程の中で「他との関わり」の中核をなすのは、一人一人の思いつきや考え、印象などを言語化し、双方から発言することで、直接他と交わり合うからである。全校態勢で「話し合い指導」に取り組もうとする第1年目として、今年度は次のように研究の方向性を定めた。

- a 「話し合い指導」について、国語科の取り組みを共有する。
b 学年や教科を合わせて、学校全体の「3年間の話し合い指導の流れ」を可視化する。
今年度は、まず第3学年の3年間の学年指導の中での話し合い指導を柱として、他の教科指導での話し合いをいくつか例としてとりあげ、生徒達の成長過程の中でどのように位置づけられるのかを眺めてみる。
c 「話し合い指導」について、教師各人の様々な取り組みを紹介し合って研究し、その成果を蓄積していく。

「話し合い指導」は、教科の中だけで独立して行われる指導ではなく、日々の生活に即した中で随時行われていく。具体的な生徒の成長過程に即して実践を検討し、それらの有効性を吟味しながら、より普遍的な指導計画を形作っていかうと考えた。

「3年間の話し合い指導の流れ図」づくり

学年の話し合い指導を軸として、3年間でどのような話し合いの機会と指導の場があるかを図にまとめ、その指導の流れを俯瞰することを試みた。学年が1年間に4回、目標とふり返りを繰り返す中に、行事と教科の指導がそのどの時期に入るかを見渡せるように企図したものである。

1年生のⅠ期、1回目のサイクルでは、体育大会準備が行事として入っている。Ⅱ期には生徒祭や合唱コンクールなど、大きな行事の話し合いが入ってくる。Ⅲ期は、校外行事、Ⅳ期には総合学習など、教科以外の活動も時期的な位置づけが明確になる。すなわち、学年、学級で繰り返していく話し合いの中に、内容面として毎回新しいことが加わり、その内容に応じた話し合いの方法や思考力の幅を広げていく様子を見取っていくための基盤を作り始めた訳である。

これに、各教科の話し合いが、その時期、内容、指導方法などについてどのように位置づけられるかが見えてくると、一人の生徒から見て、3年間の間にどのような話し合い指導がどういう順番でな

されて、どのように経験を積んでいくことになるのかという視点を確立できるであろう。

話し合い指導の振り返り

体育科「ダンス」の授業が、第1学年のⅢ期の初めに位置づけられる。学級の話し合いサイクルを2回経験し、内容的に広範囲にわたり分量も多い生徒祭や合唱コンクールを経験した直後の時期である。ここで体育科は次のような指導を行う。

グループに課題を与える「課題解決型」の学習を取り入れて、生徒自ら仲間と協力し合ってポイントを見つけ出したり、作戦を創造して実現したり、技能を高めていけるようにするが、最初の段階では「話し合いの仕方」を伝える。特に、体育ならではの「座り込まずに動きながら提案する」、創造的な活動のための「ひとり一つの提案」「否定するときは代案を出す」「ブレインストーミング」等である

この後、第1学年は校外行事に取り組むことになるが、Ⅲ期というのは、それまでの話し合い指導を更に広げ、よりアクティブな形で行われる、なかなかダイナミックな学びの時期であることが分かる。今年度の第1学年の学級担任の一人は、入学当時から校外行事が終了する頃までの生徒の変化を次のように捉えている。

4月（入学してすぐ）：この段階ですでに自分の意見をはっきりと言うことはできていた。しかし、自分の考えと離れた意見が出てきた場合は、攻撃的になったり、別の人の意見が採用された場合などはふてくされる、終わった後に決まったことに対して不平不満を言う場面も見られた。お互いに自分の意見をおつけているだけというような状態であった。

11月：校外学習のコースを決める話し合いがあったが、今回の話し合いではまず全員が意見を出し合ってから討論を進めていく風景が見られた。また、自分と方向性が違う意見に対しても、上手く取り入れることはできないかと言う話し合いの仕方をしていところもあった。反対するにしても、部分部分を自分の意見に取り入れていくことも見られた。

第3学年Ⅱ期では、音楽行事に向けて、その担当生徒が非常に熱心な話し合いを繰り返した。それまでの話し合いの集大成であるかのように、手順の確認から案の決定まで、たくさんの話し合いが生徒の力で行われた。しかし、最終的に合唱祭の本番を成功させることができなかった。その原因の一つに、楽譜の読み書き、編曲の仕方など、音楽の知識、技能が、彼らが考える音楽的なアイデアを支えるだけのレベルに達していなかったことがあげられる。当然それを指摘する指導やアドバイスを為されたが、この段階になると、生徒は自分達の話し合いに対して、強い誇りを持つようになっていて、自分達が話し合いで作り上げたイメージを覆すことが出来なかった。話し合いも成長が進むと、単に話し合いの方法論だけでなく、そのレベルの内容を支える専門的な知識・技能や彼らの自尊の感情についても配慮して行かなくてはならないことが分かった。

2. まとめと考察

小グループ、班、学級、学年という様々な規模の話し合いを入学直後から開始し、学級ごとの話し合いの成果を学年集会で発表し合う場を多く設定すること、各教科においても様々な形の話し合い活動を積極的に取り入れてきた。実践を通し、「探究する楽しさが駆動する」ためには、話し合いの態勢作りが大変重要であると考えられた。今後、更に学年・教科で、生徒の学びの育ちを「話し合い」という視点から捉え続けていきたいと思う。

(寺井・戸谷・平地・宮本・小宮)

「3年間の話し合い指導の流れ図」づくりの試み（平成24年度第3学年を例として）

学年が作成する「総合カリキュラム」の計画表を基にして、話し合いの場が生まれる主な場所を挙げだして表にしてみた。

平成24年度の第3学年が、入学時からの3年間の主だった内容を基にしているため、詳細は各学年によって異なる。

「小グループ」は、生活班、学習班、活動ごとの班、グループ等、その内容による。

学年	月	行事	平成24年度第3学年				教科	
			学年集会	学級	小グループ	行事関係		
1年	4	新入生オリエンテーション	集合、隊列、姿勢、態度等の理解	座席、生活班、学習班等の理解	各班の編成、及び活動の体感			
	5	歓迎会	学級目標報告会	学級目標審議決定	学級目標について			
		生徒総会	この間 教科指導、生活指導等での学年集会は随時	学校生活の展望	生活班の係分担、及び係会合 係の目標			
	6	生徒総会		総会 議事進行の理解及び 議案審議	総会 議事進行の理解及び 議案審議			
		体育大会		各団の目標、計画、きまり及び各係からの提案、連絡	各団、係会合	体育大会実行委員会		
	7	教育実習		行事の目標、きまり等 合唱曲目決定	係、発表団体等	生徒祭実行委員会 合唱コンクール担当		
			中間考査	学校生活の振り返り	学校生活の振り返り	生活班の係会合 活動の反省		
	8	9	生徒祭	学校生活の展望	学校生活の展望	生活班の係分担、及び係会合 係の目標		
				この間 教科指導、生活指導等での学年集会は随時	学級展示準備	生徒祭係 学級内係、担当等		
	10	合唱祭	学年練習	学級練習	パート練習 リーダー会			
		期末考査	学校生活の振り返り	学校生活の振り返り	生活班の係会合 活動の反省			
	11	1年校外学習	生徒会役員選挙	学校生活の展望	学校生活の展望	生活班の係分担、及び係会合 係の目標		
校外学習			校外学習に関する集金	校外学習に関する話し合い	校外学習の班会合	校外学習 総務	体育科(ダンス) 2時間 少人数グループ 男女共修 課題解決型 話し合いの仕方 ・教師の指導中心の活動から、生徒の自主的な活動中心へと移していく	
12	1年総合学習	マラソン大会	学校生活の振り返り	学校生活の振り返り	生活班の係会合 活動の反省			
		総合学習	総合学習に関する集金	総合学習に関する話し合い	総合学習の班会合	総合学習担当		
1	2	3	この間 教科指導、生活指導等での学年集会は随時	生徒会決算審議	評議員会・評議会	生徒会役員会		
			学校生活の振り返り	学校生活の振り返り	生活班の係会合 活動の反省			
2年	4	歓迎会	学級目標報告会	学級目標審議決定	学級目標について			
	5	生徒総会	この間 教科指導、生活指導等での学年集会は随時	学校生活の展望	生活班の係分担、及び係会合 係の目標			
		体育大会		総会 議事進行の理解及び 議案審議	総会 議事進行の理解及び 議案審議			
	6	中間考査		各団の目標、計画、きまり及び各係からの提案、連絡	各団、係会合	体育大会実行委員会		
			行事の目標、きまり等 合唱曲目決定	係、発表団体等	生徒祭実行委員会 合唱コンクール担当			
			学校生活の振り返り	学校生活の振り返り	生活班の係会合 活動の反省			

学年	月	行事	平成24年度第3学年				教科		
			学年集会	学級	小グループ	行事関係			
2	年	教育実習	学校生活の展望	学校生活の展望	生活班の係分担、及び係会合 係の目標	林間学校 総務			
			林間学校に関する集会	林間学校に関する話し合い	林間学校の班会合				
		7 志賀高原林間学校	学校生活の振り返り	学校生活の振り返り	生活班の係会合 活動の反省				
			この間 教科指導、生活指導等での学年集会は随時	生徒祭関連の話し合い	生徒祭係 自主グループ等			生徒祭実行委員会	
		8 生徒祭	学年練習	学級練習	パート練習 リーダー会				
			合唱祭	学校生活の振り返り	学校生活の振り返り			生活班の係会合 活動の反省	
		9 期末考査	学校生活の振り返り	学校生活の振り返り	生活班の係分担、及び係会合 係の目標				
			生徒会役員選挙	この間 教科指導、生活指導等での学年集会は随時	学校生活の振り返り			学校生活の振り返り	生活班の係会合 活動の反省
		10 マラソン大会	学校生活の振り返り	学校生活の振り返り	生活班の係分担、及び係会合 係の目標				
			2年総合学習	総合学習に関する話し合い	総合学習の班会合			総合学習担当	
		11	年	この間 教科指導、生活指導等での学年集会は随時	学校生活の振り返り	学校生活の振り返り		生活班の係会合 活動の反省	体育科(ダンス) 12時間
					学校生活の振り返り	学校生活の振り返り		生活班の係分担、及び係会合 係の目標	
12	年	この間 教科指導、生活指導等での学年集会は随時	生徒会決算審議	評議員会・評議会	生徒会役員会	課題解決型 女子のみ 各時間の内容によってグルー プの人数を変える 教師の指導中心の活動か ら、生徒の自主的な活動中心 へと移していく			
			学校生活の振り返り	学校生活の振り返り	生活班の係会合 活動の反省				
1	年	この間 教科指導、生活指導等での学年集会は随時	学校生活の振り返り	学校生活の振り返り	生活班の係会合 活動の反省	体育科(ダンス) 5時間 男女共修 体育大会応援ダンス ブレインストーミング リーダー生徒による演技構 成 リーダー生徒の数量による 演技制作			
			学校生活の振り返り	学校生活の振り返り	生活班の係分担、及び係会合 係の目標				
2	年	この間 教科指導、生活指導等での学年集会は随時	学校生活の振り返り	学校生活の振り返り	生活班の係会合 活動の反省	音楽科 放課後12回			
			学校生活の振り返り	学校生活の振り返り	生活班の係分担、及び係会合 係の目標				
3	年	この間 教科指導、生活指導等での学年集会は随時	学校生活の振り返り	学校生活の振り返り	生活班の係会合 活動の反省	有志合唱企画16名 有志合唱のテーマ 発表のコンセプト 楽曲決定 運営手順等 15分間の総合的な表現の ステージについて全て生 徒の話し合いによって企 画・運営をしていく			
			学校生活の振り返り	学校生活の振り返り	生活班の係分担、及び係会合 係の目標				
4	年	この間 教科指導、生活指導等での学年集会は随時	学校生活の振り返り	学校生活の振り返り	生活班の係会合 活動の反省				
			学校生活の振り返り	学校生活の振り返り	生活班の係分担、及び係会合 係の目標				
5	年	この間 教科指導、生活指導等での学年集会は随時	学校生活の振り返り	学校生活の振り返り	生活班の係会合 活動の反省				
			学校生活の振り返り	学校生活の振り返り	生活班の係分担、及び係会合 係の目標				
6	年	この間 教科指導、生活指導等での学年集会は随時	学校生活の振り返り	学校生活の振り返り	生活班の係会合 活動の反省				
			学校生活の振り返り	学校生活の振り返り	生活班の係分担、及び係会合 係の目標				
7	年	この間 教科指導、生活指導等での学年集会は随時	学校生活の振り返り	学校生活の振り返り	生活班の係会合 活動の反省				
			学校生活の振り返り	学校生活の振り返り	生活班の係分担、及び係会合 係の目標				
8	年	この間 教科指導、生活指導等での学年集会は随時	学校生活の振り返り	学校生活の振り返り	生活班の係会合 活動の反省				
			学校生活の振り返り	学校生活の振り返り	生活班の係分担、及び係会合 係の目標				
9	年	この間 教科指導、生活指導等での学年集会は随時	学校生活の振り返り	学校生活の振り返り	生活班の係会合 活動の反省				
			学校生活の振り返り	学校生活の振り返り	生活班の係分担、及び係会合 係の目標				
10	年	この間 教科指導、生活指導等での学年集会は随時	学校生活の振り返り	学校生活の振り返り	生活班の係会合 活動の反省				
			学校生活の振り返り	学校生活の振り返り	生活班の係分担、及び係会合 係の目標				
11	年	この間 教科指導、生活指導等での学年集会は随時	学校生活の振り返り	学校生活の振り返り	生活班の係会合 活動の反省				
			学校生活の振り返り	学校生活の振り返り	生活班の係分担、及び係会合 係の目標				
12	年	この間 教科指導、生活指導等での学年集会は随時	学校生活の振り返り	学校生活の振り返り	生活班の係会合 活動の反省				
			学校生活の振り返り	学校生活の振り返り	生活班の係分担、及び係会合 係の目標				
1	年	この間 教科指導、生活指導等での学年集会は随時	学校生活の振り返り	学校生活の振り返り	生活班の係会合 活動の反省				
			学校生活の振り返り	学校生活の振り返り	生活班の係分担、及び係会合 係の目標				
2	年	この間 教科指導、生活指導等での学年集会は随時	学校生活の振り返り	学校生活の振り返り	生活班の係会合 活動の反省				
			学校生活の振り返り	学校生活の振り返り	生活班の係分担、及び係会合 係の目標				
3	年	この間 教科指導、生活指導等での学年集会は随時	学校生活の振り返り	学校生活の振り返り	生活班の係会合 活動の反省				
			学校生活の振り返り	学校生活の振り返り	生活班の係分担、及び係会合 係の目標				

探究の楽しさと道徳

1. 『探究する楽しさ』が駆動する学び』と道徳

道徳教育では、道徳性を教育活動全体で育む教育である。道徳性とは、人間としての本来的な在り方やよりよい生き方を目指してなされる道徳的行為を可能にする人格的特性であり、人格の基盤をなすものである。また、個人の生き方のみならず人間のあらゆる文化的活動や社会生活を根底で支えていく基盤となるものでもある。これは、生徒一人ひとりの豊かな価値観の形成を促すことであり、「～がわかる」「～ができる」という習得的、到達目標的なねらいだけでなく、「～を高める」「～を培う」という向上目標的な視点、すなわち探究的な面での学習が重視されている。様々な価値観や他者理解、学び合いの姿勢を育てていくことは、「どのように探究するか」という自律的、主体的な学びにつながるのと同時に、「『探究する楽しさ』が駆動する学び」の創造につながると思う。

2. 本校の「道徳教育」について

本校の道徳教育の変遷については、「道徳の時間」が新設された昭和33年の学習指導要領改訂時から平成24年度までの流れを、平成24年度公開研究会紀要に示してあるのでそちらを参照していただきたい。

平成24年度はこれまでの本校の道徳教育の流れを受けて、「道徳の時間」の授業を、各学年週1時間を「総合カリキュラム」の中に確保し、道徳教育の充実をはかることを目標とした。その為、道徳教育の全体計画を見直し、生徒や保護者にも本校の道徳教育の指導目標を示すなど、学校教育目標や各教科、特別活動、自主研究、総合的な学習（お茶の水タイム）、との関連がわかるようにした。5月の保護者会では、「各教科の指導のねらい」（保護者向け資料）の中に「道徳指導のねらい」についても示し、各学年の道徳担当者を中心に重点目標を検討し、研究授業や授業実践を通して「お茶の水の道徳教育」の指導の充実と生徒の伸長を図っていくこととした。

3. 道徳教育の全体計画について

平成24年の道徳教育の全体計画については、本校の教育の特色である「総合カリキュラム」との関連を図りながら、「道徳教育の目標」「道徳に対する指導の重点」「具体的な指導の方針」「各学年の重点項目」として示した。（平成24年度公開研究会紀要参照）

4. 今年度の取り組みについて

今年度の具体的な取り組みについては以下の通りであった。

(1) 各学年の計画的な取り組みを支援

①研究会での実践事例紹介

②道徳教育に関わる校内研修を実施（研究会・講演会など）

(2) 実践事例の蓄積

①道徳BOXの設置と各学年の道徳資料やプリントを保存

②共有文書にデータ保存

③道徳の研究授業の推進

(3) カリキュラムの作成

①年間計画に特活、総合的な学習との関連を図りながら「道徳の時間」を位置づけた

帰国グループ

「『探究の楽しさ』が駆動する学び」を追究していく中で、改めて帰国生対象の授業でそれぞれの教科が大切にしてきたことを見直し、現在の帰国生に見合ったよりよい学びを追求していくことが全ての生徒の学びをよりよくしていくことにつながると考え、帰国グループでは、

- ① 『探究の楽しさ』が駆動する学び』につながる帰国生ならではの学びについての効果検証
- ② これからの帰国生の教育を考える上でのニーズ調査としての校外研修の二つを今年度の活動の柱として取り組んできた。

1. 帰国生対象の研究授業

「『探究の楽しさ』が駆動する学び」につながる帰国生ならではの学びについて研究するために、第一学年竹組（帰国子女教育学級・男子5名女子10名）を対象に、今年度は二つの研究授業を行った。

(1) 授業実践の概要

① 「有機物と無機物の区別」(理科) (授業者：渡邊) 実施日：6月26日

身のまわりの物質が、炭素を含む有機物とそれ以外の無機物に分けられるということを題材とした授業である。授業の中で「探究の楽しさ」を見いださせるために、導入としてゴミの分別を扱い、身近な事象との関わりを強調する授業展開が考えられていた。その際に、帰国前に住んでいた国でのゴミの分別がどんなものであったかや、現在とどう違うかを生徒に尋ねることで興味を喚起していた。できるだけ実生活に関わる形で題材を取りあげることと同時に、何らかの形で帰国生の海外生活が反映されたり、活かされたりするものを考え準備しておくことにより、学習をより意欲的にしていく効果があったと考えられる。

また、授業展開の中で、予想することの大切さが強調されていた。「なぜ？もっと知りたい」という気持ちを起こさせ、探究を連続させる方向に持って行く上で、このような理由を考えさせることや小さな疑問を安心して発言できる学習の場を提供することは大切である。特に、一般のクラスの生徒に比べ、積極的に意思表示をする生徒が多い帰国生のクラスでは、こうした工夫がより一層重要であると考えられる。

② 「比例と反比例」(数学) (授業者：大塚) 実施日：1月22日

比例や反比例を式で理解するのではなく、比例や反比例の関係性がある具体的な事象をとらえ、説明できることをねらいとした授業である。具体的な事象の例として用いたのは、歯車の歯の数と回転数の関係で、実際に歯車の形をしたブロックを生徒に配布し、手を動かして関係を調べながら比例や反比例の関係を見いださせる工夫が見られた。教科書の中で既に与えられた法則を使って問題を解くのではなく、実際に手を動かして法則を見つけ、説明していく活動を通して「探究の楽しさ」が見いだされるよう考えられていた。

日本と海外では小学校の算数で扱う内容が大きく違う場合があるため、帰国生の中には基本的な数学の力がついていない生徒も見られる。そうした状況に配慮し、分数の計算など小学校の既習範囲であっても、丁寧にひとつひとつ手順を確認して授業が進められていた。

(2) 成果

共通して配慮されていたことは、授業者の言葉の使い方と、一般学級との既習内容の差である。言葉の面では、板書の漢字にルビを振ったり、発問時の言葉の表現を統一したりという配慮が見られた。また、生徒一人一人が異なる知識を持つことを受けて、小学校の学習範囲の細かい確認などが、授業

の各所で見られた。

更に、言葉だけで説明することにとどまらず、なるべく実物に触れさせる工夫も随所に見られた。帰国学級の生徒は、基盤となる言語の力が不十分であるために、言葉から具体的なイメージをふくらませることが難しい場合が多い。そうした生徒に対しては、実物に触れさせたり、説明に図を多用することで、理解を助け、もともと持っている力を伸ばすことができると考えられる。

これらの配慮や工夫は、帰国子女学級の生徒の学びにのみ助けとなるだけではなく、一般学級の授業でも新しい学びを生み出す助けになると考えられる。理解が不十分な生徒に対して、これらの配慮は学習の助けになるであろうし、実物に触れることや、「なぜ？」を持ちやすい環境を作ることは、全ての生徒が「探究の楽しさ」を見い出し、主体的な学びに取り組むことにつながるであろう。

2. 校外研修の総括

以下のように様々なプログラムや教育スタイルを持つ学校を訪問し、様々な視点からこれからの帰国生の教育に向けて何が必要かを考えていく参考とした。

(1) 成蹊学園

- ① 「グローバルな時代における活躍」を期待し、学園全体が縦断して国際教育に力をいれ、留学生も多数いる。
- ② 80年近く前から帰国生を受け入れることを始めており、国際学級（小学校・中学1年に設置されている帰国生のクラス）や帰国生編入（中学2年以上～高校）制度があり、海外生活を経験した生徒が学園に多数いる。

以上のように帰国生にとって生活しやすい恵まれた環境が準備されているといえる。その中で、中学校での帰国生に対する受け入れは、日本の教育と異なる環境で教育を受けてきた生徒の「日本への早期の適応教育」を目的として位置づけられており、少人数で、個々に合ったきめ細やかな指導をしていくことを基本としている。日本への早期適応ということが目的であるため、基本的に1年時から授業の内容や試験は一般生のクラスとほぼ同じであり、2年生からは、帰国生の特別クラスはなく、全て一般クラスへと混入されていく。中高一貫校でもあるこの学園は、入学後高校進学、その先の進路を見据えた教育・指導を行うことを重視し、学力の定着をはかっている。早期適応のために具体的なカリキュラムの配慮については、中学1年の国際学級は、国語・社会に重点を置き、特に国語の時間数は他のクラスより多く、1年間で徹底した言語の補強を行う体制が整っている。同時に現地で習得した言語力を伸ばしていくため、中学2、3年生では「英語の特設クラス」が設けられている。

帰国生にとって生活しやすい環境と帰国生教育の目的が明確化され遂行しやすい体制がとられていることが印象的であった。編入でより多くの帰国生が存在し、学園全体が国際的な環境ともいえるということや、早期適応のために1年時にしっかりと言語や文化面などの補強がしやすいカリキュラムになっていることなどである。私学であるからこそカリキュラムや帰国生の受け入れ人数に、裁量の余地があり実施できることであるが、本校も「帰国生クラス」の1年間でどんな力をつけ何に重点を置くかという目的を精選し、明確化していくことでより効果のあがる帰国生教育を考えていくべきではないか、言語面の補強のための有効な手立てを考えるべきではないかといった点で、本校の帰国生クラスのあり方や効果的な方法を改めてふり返ることができた。

(2) 加藤学園

英語イメージと国際バカロレアのプログラムを共に導入し、国際的な社会で生き、活躍していることを目指し、バイリンガルとしての言語面と学力面・人間性といった両面を重視していること

が特徴的である。帰国子女教育というプログラムはないが、IB（国際バカロレア）という世界的に評価されているプログラムを導入し、総合的・体系的な指導や援助がなされている。英語のネイティブスピーカーの教員の確保もされ、人材的にも体制的にもシステムが整っており、生徒をしっかりと見守り支援していつている。

国際的な社会で生き、活躍していけることを目指し、人間性の育成を重視している方針とカリキュラムの在り方は、本校の目指すところと共通する面があるが、帰国子女教育にも参考になると思われる具体的な体制や方法を二点ほど挙げておく。

① 生徒への対応や指導は、組織的に整ったものであり、基準が明確でそれに満たされていない状況が生じると、迅速で徹底した指導がなされる。具体的には、必要と判断されたときに、随時迅速にその教科の先生と面談（学習指導の場合も）を行ったり、保護者に連絡をとったりとその場に応じたこまめな対応が日常的になされている。また、言語面の補強を中心とした放課後の補習も定期的に行われている。

② 「自ら考え行動し、社会に貢献していく人間育成」を目指し、思考力、表現力、想像力を重視し教科横断的学習を実施するといったIBの基本的理念や具体的な方策は、これからのグローバルな社会に生きていく生徒たちの姿を明確にしているものである。小プロジェクト的な学習課題において、どのようにその課題や研究を進めていくか丁寧に手順や方法、手引きを指示したタスクシートに見られる学習のステップが、具体的に可視化されるなどそのための手順や方法が具体的に体系化され明確であり、鮮明な目指す姿につながるものである。また、評価については、「世界基準」と呼ばれる評価基準によって、どの教員が評価しても同じ結果になることを目指し、体系的・客観的に定められている点など、生徒自らが考え学んでいく力を育成していく上での具体的な方策を、本校でも見直していく必要があると思われる。

(3) 関西学院千里国際中等部・高等部 (SIS) 大阪インターナショナルスクール (OIS)

帰国生・一般生・外国籍の子ども達が、主に英語を共通語として学校生活を送っている、日本で唯一日本の学校とインターナショナルスクールが併設する関西学院千里国際中等部(SIS)、大坂インターナショナルスクール(OIS)を訪問した。

SISは、国際バカロレア(IB)の手法をカリキュラムに取り入れ、中等部・高等部があり帰国生と一般生が在籍している。OISは、IB資格を有しており、幼稚園・小学校・中学校・高等学校があり、外国籍の子ども達が在籍している学校である。在籍数は、帰国生(SIS)・一般生(SIS)・外国籍生徒たちを(OIS)それぞれ三分の一で構成されている。このSISとOISの二つの学校は、「知識をもち、思いやりをもち、創造力をもって世界に貢献する個人」に育てることを一つのミッションとしている。

カリキュラム編成では、前述の通り、世界へ通用する学力を学ぶ手段としての英語教育に力を入れている。少人数でのゼミ形式やコミュニケーションを多く取れるような授業や、習熟度別授業(5段階)も展開し、自分の力を知り、その習熟度に合った授業を自主的に選択する力をつけ、多くの学習課題を学ぶ中で達成感をえられるよう授業を進めている。この手法は英語だけではなく、他の教科についても協働的に探究力を養うよう工夫されていた。各授業は最大でも20名を超える程度で、コミュニケーションを主体とした授業を展開している。真に教員の技量が問われる場でもある。

この学校を視察し、本校の研究のテーマ「『探究の楽しさ』が駆動する学びの創造」をめざしこれからの教育研究をすすめる中で、良い見本となる学校であった。また、これまでの本校の帰国研究を一步進める上で、色々な視点を取り入れ、よりよい教育実践につながる示唆を得た。

(4) 啓明学園中学・高等学校 国際学級

啓明学園中学・高等学校は、古くから帰国生を受け入れている学校である。今年度の7月の研究会で、この学校の佐々校長先生のお話を聴く機会があった。それを踏まえ、今回の訪問では、特に国際学級における指導の実際や生徒たちの姿を参観すると同時に、先生方の帰国生指導に対する考え方や教材等の工夫について直接話を聴くことを目的とした。

この学校の先生方の帰国生指導における基本理念として本校も大変共感するのは、「心を支える」と「言語を支える」ことの2つがあると言える。

まず、「心を支える」については、日本では異質なもののへ受容が寛容とは言えない状況があるため、帰国生たちの気持ちをシェアできる環境を整えることを大切にしている。自己肯定感を持てる機会を増やすことは、その一例である。また、日本語教育をスムーズに進めるためには、「日本を許せるか、認められるか、受け入れられるか」が大事であるという。日本を拒否する気持ちがあると、どうしても勉強ではなく作業となってしまう、表面上はできているように見えても実は身に付いていかないのが実情である。

もう一つの「言語を支える」については、既存のテキストをただ使うのではなく、日本語教育用の教材を独自に開発している。例えば「天声人語」など新聞のコラムを利用して、1) 漢字の問題、2) 内容を問う読解力を見る問題、3) そのコラムのテーマについての作文を書く課題を載せたプリントを何種類も作成している。それらのプリントは、総振り仮名・振り仮名無しで両面印刷にしてあり、生徒たちが自分のレベルにあわせて選択して学習できるようになっている。また生徒たちが書いた作文は添削され、よく書けたものは教室に掲示することで生徒のやる気につながっている。さらに、「言語を支える」ために、その生徒にとって強い言語を強くすることを基本的な考え方として持っている。

幼児期に複数の言語圏を転々とした生徒の場合、どの言語も不完全であるため、認識そのものが不確かで、思考そのものも曖昧で、どの教科も伸びにくい。わからない言語の中にいるストレスから逃れるために無意識に聞き流す癖が幼児期からついてしまっている生徒もいるため、注意深く観察して確認するなどのきめ細かな指導が必要となる、という指摘は大変参考になった。また、優位言語が英語である帰国生に対しては、TOFELスコアの目標点を示し、そのスコアを超すように指導しており、能力別の最上位クラスでは海外で使用しているテキストと同じものを使用して学習している。

このように、国際学級では「心を支える」と「言語を支える」の2つを適切に結びつけ、帰国生に寄り添い、卒業後の人生までも考えて指導している点を本校の帰国子女教育においても参考にしていきたい。

(5) まとめ

訪問した学校は、帰国生の受け入れを行っているという学校だけでなく、インターナショナルスクールやバイリンガル教育のプログラムを実施している学校など言語教育や国際教育に関わる多種多様な学校である。あえて、こうした様々な異なるプログラムや教育方法をとっている学校を研修の対象にさせていただいたのは、社会がますます多様なものとなってきている中で、帰国生自身も多様化している現状に対応しうる「これからの帰国子女教育」を考えると、私達教員自身が多種多様な教育の在り方や学校の状況を知って、多角的な視点を持つ必要があると思われたからである。確かに一見それぞれの学校は、独自の教育を行っていて異なるものだが、その中で共通していることもやはり存在する。例えば「帰国生の個々に応じたきめ細やかな対応をしていく」という基本方針は、方法は多様だが、本校を始めとし帰国生を受け入れている学校には共通するものである。また学校のシステムやプログラムが全く異なる学校でも、目指す生徒像が共通するものもあり、「効果的な学び」を作り出していく方法として参考になる部分もあった。本校の教育方針、帰国子女教育の目的をしっかりと見

据えつつ、研修で学ばせていただいとことをうまく取り入れていきたいと思う。

(市川・佐々木・関根・渡邊)

Ⅲ 終わりに

平成25年度の研究テーマに向けて

平成24年度は、前年度までの3年間にわたる開発研究を基盤に「『探究の楽しさ』が駆動する学びの創造」を新たなテーマとして掲げ、研究を進めてきた。年度末を迎えた現在、研究が本格的に動き出したところであるため、平成25年度もこれまでと同じ研究の方向性で研究を継続し、深めていくこととした。

平成25年度は、本校における帰国子女教育学級創設35年目という節目の年であり、5年の1度の帰国子女教育協議会が予定されている。本校の帰国子女教育の基本姿勢は、帰国生の学びをつぶさに見取り、個々の生徒の学びに必要な指導の工夫や支援の在り方を見出していくというものである。このようにして見出された支援は必ず一般生を含めた「子どもの学びの支援」へと広がっていくことを経験してきた。平成24年度に引き続き平成25年度においても「『探究の楽しさ』が駆動する学びの創造」を帰国生の学びにおいても模索し一般生の学びへと拡げていきたいと考えている。

上に述べたことを踏まえ、仮ではあるが、帰国子女教育研究を含めた研究テーマ、サブテーマを下に示すように設定し、気持ちを新たに研究を歩み始めている。

「『探究の楽しさ』が駆動する学びの創造（2年次）」（仮）
 -グローバル化する社会を生きる子どもの育成（仮）-

【資料】

研究プロジェクトチーム（◎研究推進委員・チームリーダー、○研究推進委員、☆研究推進委員長）

(1) 探究の楽しさと基礎・基本	大塚（1年数学）、◎加藤（2年英語）、☆菌部（3年理科）、佐藤（3年体育）、栗原（3年家庭）
(2) 論理的思考力	寺本（1年社会）、◎宗我部（2年国語）、前川（2年理科）、牧野（2年保健）、田口（3年数学）
(3) 話し合いの力	平地（1年技術）、寺井（1年国語）、宮本（2年体育）、戸谷（3年国語）、◎小宮（3年音楽）
(4) 道徳	◎小泉（1年美術）、西平（1年英語）、松本（2年数学）、木村 ^{雅英} （2年社会）、中島（3年英語）
(5) 帰国生の学び	○渡邊（1年理科）、関根（1年体育）、◎市川（2年国語）、佐々木（3年社会）、（木村 ^{真冬} （大学出向））

研究推進委員会は週1回、年間38回実施し、校内研究会は月1回、年間12回実施した。（菌部）